

栗原市文化財調査報告書第14集

青野遺跡ほか

平成23年3月

宮城県栗原市教育委員会

栗原市文化財調査報告書第14集

青野遺跡ほか

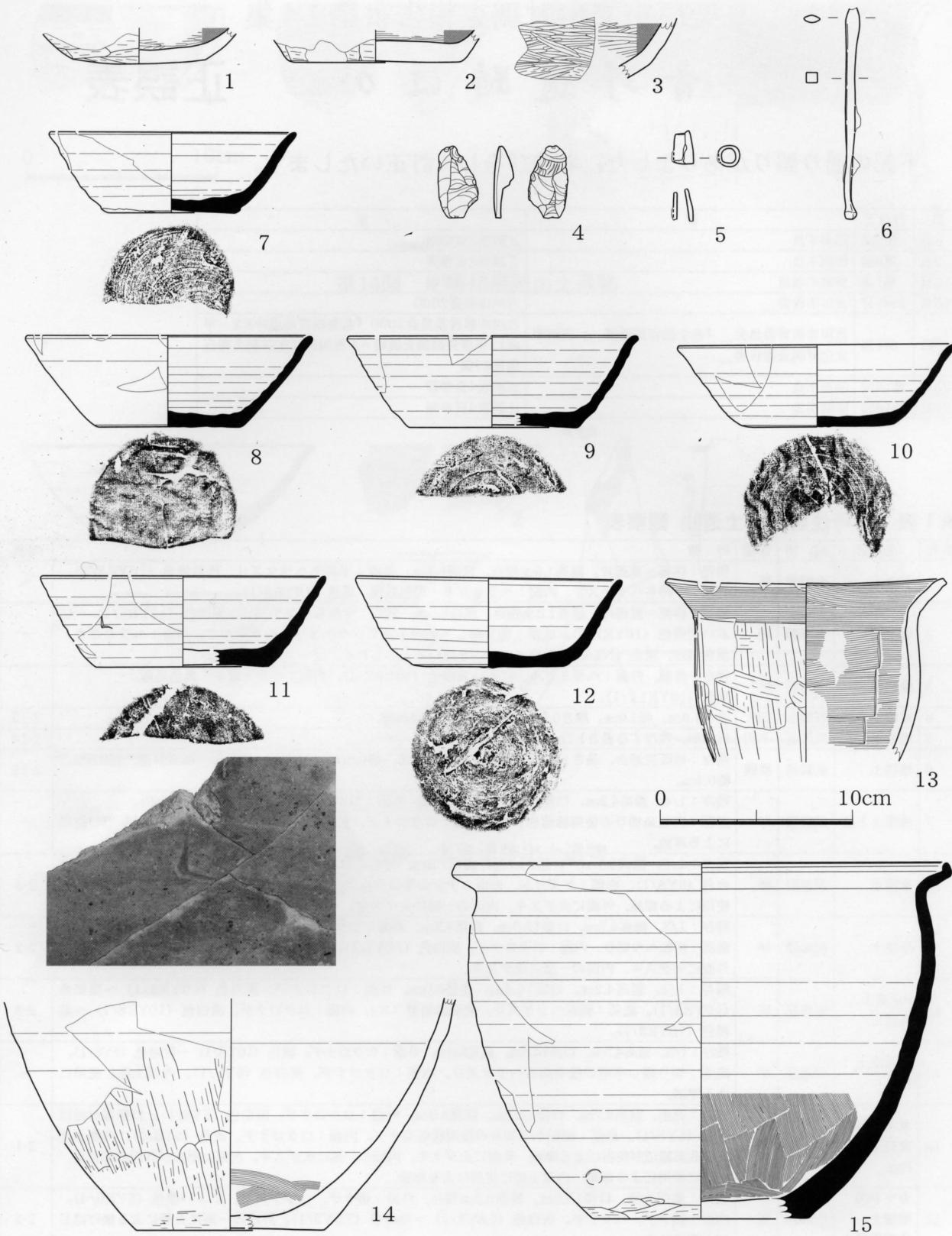
正誤表

下記の通り誤りがありました。お詫びをして訂正いたします。

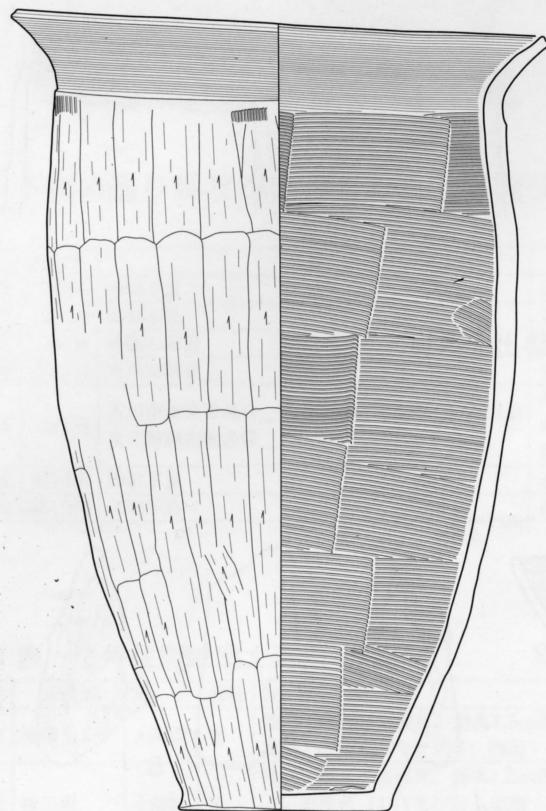
頁	行など	誤	正
8頁	第5図	印刷不良	正誤表2頁参照
9頁	第6図	印刷不良	正誤表3頁参照
10頁	第1表	特徴の項目	正誤表1頁参照
15頁	30行目	古川市教委	古川市教委2000
18頁	5行目	古川市教育委員会『名生館官衙遺跡』古川市文化財調査報告書	古川市教育委員会2000『名生館官衙遺跡XX－平成11年度発掘調査概報－』古川市文化財調査報告書第27集
23頁	第14図	印刷不良	正誤表4頁参照
29頁	第19図	印刷不良	正誤表4頁参照

第1表 2号住居跡出土遺物 観察表

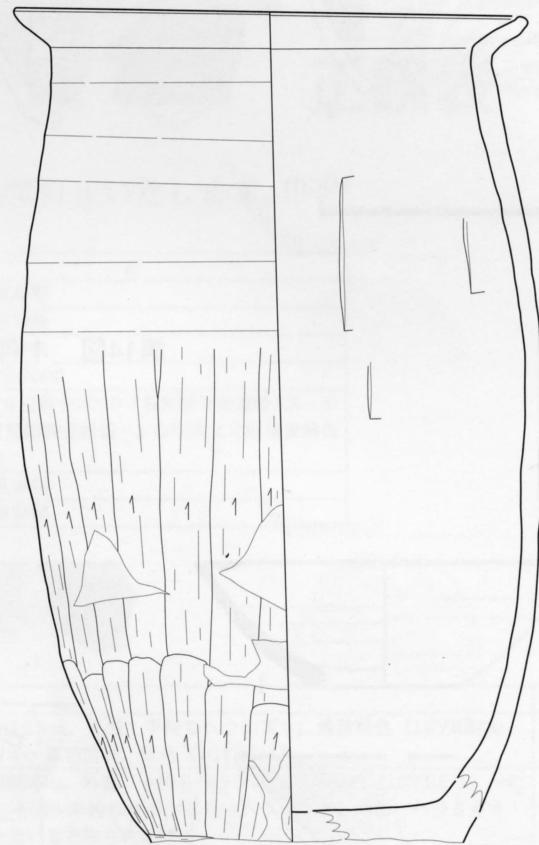
番号	遺構層	種別	器種	特徴	写真
1	堆積土	土師器	壺	残存：体部～底部片。器高1.5cm残存。底径6.8cm。外面：手持ちヘラケズリ。浅黄橙色(10YR8/3)。 底部：手持ちヘラケズリ。内面：ヘラミガキ・黒色処理。黒色(10YR2/1)。	—
2	検出面	土師器	壺	残存：体部～底部片。器高1.2cm残存。底径8.6cm。外面：手持ちヘラケズリ。褐灰色(10YR5/1)～にぶい黄橙色(10YR7/2)。底部：切り離し不明→手持ちヘラケズリ→ヘラミガキ。内面：ヘラミガキ・黒色処理。黒色(N2/0)。製作にロクロを用いるとみられる。	—
3	検出面	土師器	壺	残存：体部。外面：ヘラミガキ。にぶい黄橙色(10YR7/4)。内面：ヘラミガキ・黒色処理。黒色(10YR1.7/1)。	—
4	堆積土	石製品	剥片	長さ1.9cm。幅1.0cm。厚さ0.5cm。黒曜石製。両極剥離。	2-13
5	堆積土	鉄製品	不明	円筒形。残存する長さ1.7cm。幅1.0～1.1cm。	2-14
6	堆積土	鉄製品	鉄鏃	残存：ほぼ完形か。長さ11.2cm。莖部：断面四角形。幅0.6cm、厚0.5cm。鏃身部：断面鉢型。幅0.6cm。幅0.4cm。	2-12
7	堆積土上層	須恵器	壺	残存：1/4。器高4.2cm。口径12.6cm。底径6.5cm。外面：ロクロナデ。灰色(N5/0～N4/0)。 底部：回転糸切りの後周縁部をナデ。内面：ロクロナデ。灰色(N5/0)。内面上部及び底部縁辺が使用による摩滅。	—
8	堆積土	須恵器	壺	残存：1/2。器高5.1cm。口径14.7cm。底径7.3cm。外面：ロクロナデ。底部付近手持ちヘラケズリ。灰白色(5Y8/1)。底部：ケズリか。内面：ナデの後ロクロナデ。灰白色(5Y8/1)。内面下部及び底部が使用による摩滅。外面に火ダスキ。内面の一部に火ダスキ。	2-3
9	堆積土	須恵器	壺	残存：1/3。器高4.7cm。口径15.0cm。底径8.8cm。外面：ロクロナデ。灰白色(7.5Y7/1)。 底部：回転ヘラ切り。内面：ロクロナデ。灰白色(5Y7/1)。内面上部及び底部縁辺が使用による摩滅。外面に火ダスキ。内面の一部に火ダスキ。	2-2
10	B床直上、堆積土	須恵器	壺	残存：1/3。器高4.2cm。口径14.4cm。底径8.0cm。外面：ロクロナデ。灰白色(10YR8/1)～黒褐色(10YR3/1)。底部：回転ヘラケズリ。焼成前刻書「×」。内面：ロクロナデ。灰白色(10YR8/1)～黒褐色(10YR3/1)。	2-3
11	床面直上 Po3	須恵器	壺	残存：1/5。器高4.7cm。口径14.6cm。底径9.0cm。外面：ロクロナデ。灰色(10Y8/1)～灰白色(5Y8/1)。 底部：切り離し不明の後手持ちヘラケズリ。内面：ロクロナデ。灰白色(5Y8/1)。内面上部に使用による摩滅。	—
12	カマド右脇 黄褐土上 Po2	須恵器	壺	残存：完形。器高4.7cm。口径13.7cm。底径8.0cm。外面：ロクロナデ。灰白色(5Y8/1)。口縁部付近は灰色(5Y5/1)。底部：回転ヘラ切りの後周縁部をナデ。内面：ロクロナデ。灰白色(5Y5/1)。内面上部及び底部縁辺が使用による摩滅。外面に火ダスキ。内面の一部に火ダスキ。内面上部及び外面底部付近、底部に使用による摩滅。内面上部に使用による摩滅。	2-1
13	カマド内 堆積土、 住居堆積土	土師器	甕	残存：底部欠損。口径14.0cm。器高9.5cm残存。外面：横ナデ、ヘラケズリ。にぶい橙色(5YR6/4)。 内面：横ナデ、ヘラナデ。灰白色(7.5Y8/1)～黒褐色(7.5Y3/1)。外面上部に火熱による焼けはじけがみられる。	2-5
14	堆積土	土師器	甕	残存：体部～底部。器高12.0cm残存。底径9.6cm。外面：ロクロナデ、ヘラケズリ。にぶい橙色(7.5YR7/4)。 底部：摩滅。内面：ロクロナデ。横ナデ。にぶい橙色(7.5YR7/4)	2-7
15	堆積土	須恵器	鉢	残存：1/3。器高18.4cm。口径25.2cm。底径11.0cm。外面：ロクロナデ。灰色(7.5Y5/1)。 底部：切り離し不明の後手持ちヘラケズリ。内面：ロクロナデ。灰白色(5Y7/1)。内面上部及び底部縁辺が使用による摩滅。外面に火ダスキ。内面の一部に火ダスキ。	2-6
16	堆積土	土師器	甕	残存：完形。器高30.8cm。口径20.8cm。底径：8.4cm。外面：横ナデ。ハケメ→ヘラケズリ。にぶい黄橙色(10YR8/1)。底部：ヘラケズリ。内面：横ナデ。ハケメ。灰白色(10YR8/1)。	2-9
17	堆積土	土師器	甕	残存：3/5。底部欠損。器高22.4cm残存。口径20.4cm。外面：横ナデ、ヘラナデ、ヘラケズリ。にぶい黄橙色(10YR6/4)。底部：剥離。内面：ロクロナデ。ヘラナデ。黒褐色(10YR3/1)～にぶい黄橙色(10YR7/3)。	2-11
18	堆積土	土師器	甕	残存：3/5。器高28.5cm。口径19.8cm。底径8.4cm。外面：ロクロナデ、ヘラケズリ。浅黄橙色(10YR8/3)～灰黃褐色(10YR5/2)。底部：木葉痕。内面：横ナデ。ヘラナデ。磨滅。灰白色(10YR8/2)。	2-10
19	K1Po1	土師器	甕	残存：体部～底部。器高24.4cm残存。底径10.0cm。外面：ヘラケズリ。灰白色(10YR8/1)。 底部：木様痕、縁辺を手持ちヘラケズリ。内面：ナデ。ヘラケズリ。灰白色(10YR8/1)。	2-8



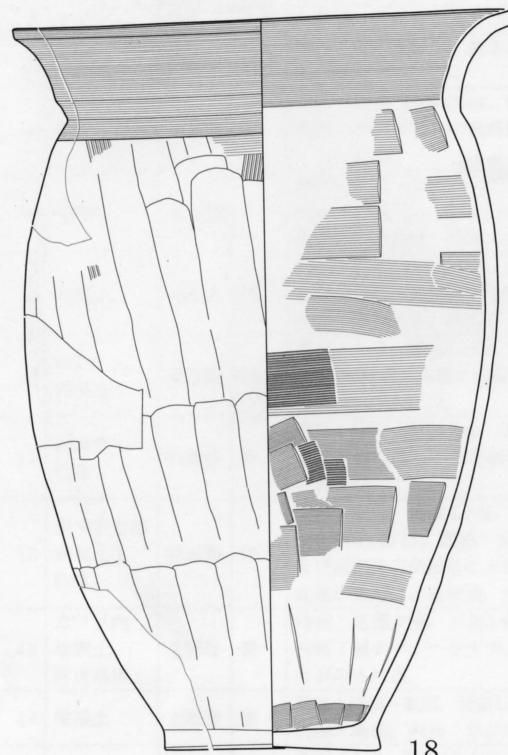
第5図 2号住跡出土遺物（1）



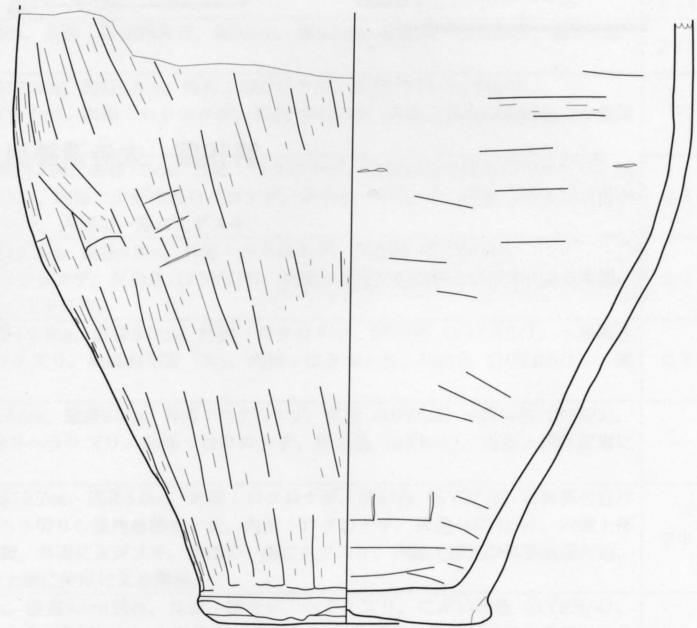
16



17

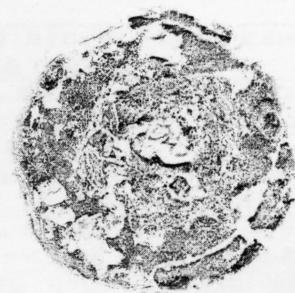


18

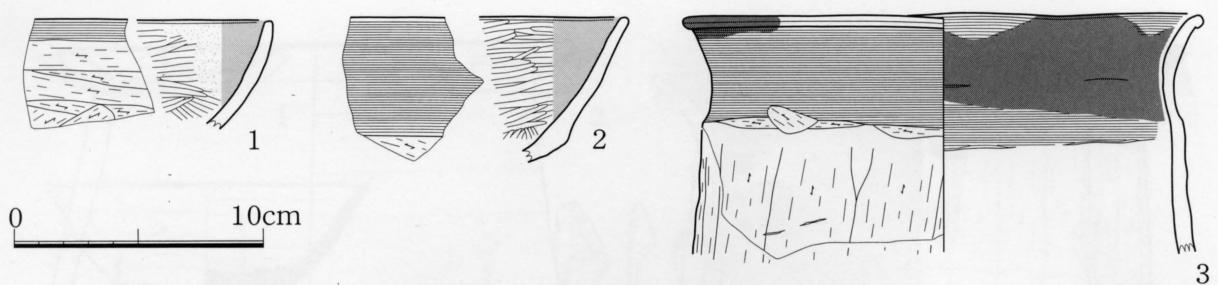


19

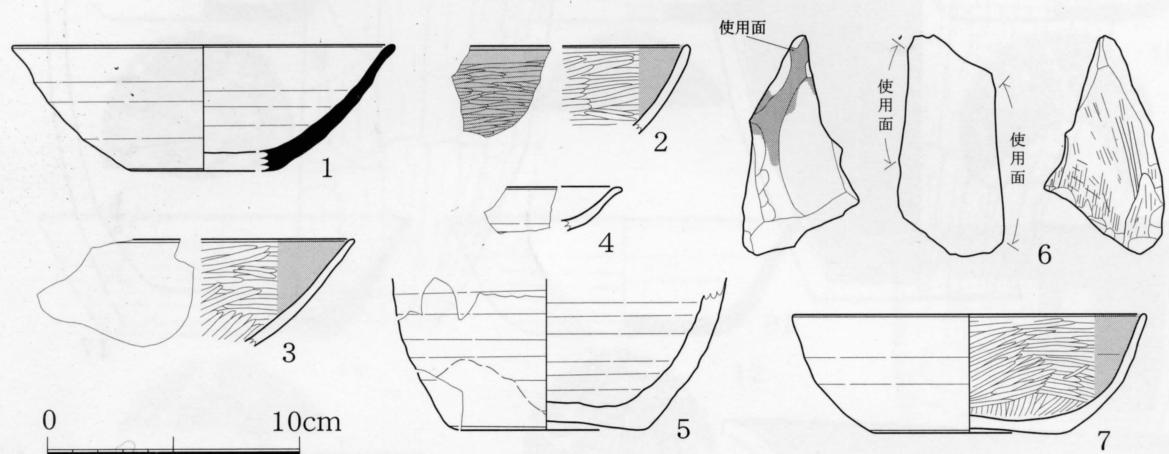
0 10cm



第6図 2号住居跡出土遺物（2）



第14図 1号住居跡出土遺物



第19図 大寺遺跡出土遺物

青野遺跡ほか

序 文

宮城県の北西部に位置する栗原市には、豊かな自然と歴史的遺産が数多く残っております。市内には国指定文化財や県指定文化財、市指定文化財のほか様々な文化財が地元の方の努力により大切に守り継がれてきました。これらの貴重な歴史的遺産を次の世代に継承していくことは、今の時代を生きるわれわれの責務であります。

一方、地域に暮らす住民の方々の命や財産を守ることも非常に重要なものです。今回、築館地区に所在する青野遺跡において防火水槽設置に伴う発掘調査などを実施いたしました。埋蔵文化財の保護を行ううえで開発計画との調整は重要であります。栗原市教育委員会では埋蔵文化財の範囲を周知し、速やかに開発計画を把握し、協議や調整を行い、開発担当部局から埋蔵文化財の保護についてご協力をいただいているところです。協議や調整を行わないと開発事業を円滑に進めることはできません。今後も、周知や協議、調整を徹底して文化財の保護に尽力していきたいと考えています。

最後になりましたが、調査にご指導・ご協力していただきました、宮城県教育庁文化財保護課、発掘調査を実施するにあたりご協力いただきました地元の方々に深く感謝申し上げます。

平成23年3月

栗原市教育委員会教育長 亀井芳光

目 次

序文

目次

例言

青野遺跡

I . 調査に至る経緯	1
II . 基本層序	2
III . 検出された遺構と遺物	4
1 . 堅穴住居跡と出土遺物	
2 . 溝跡と出土遺物	
3 . 遺構外出土遺物	
IV . 考察	12
1 . 堅穴住居跡の年代について	
2 . 堅穴住居跡の構造と問題点について	
3 . 2号住居跡のカマド構築方法と問題点について	
4 . 集落構造と問題点について	
V . まとめ	17

経ヶ崎遺跡

I . 調査に至る経緯	19
II . 基本層序	20
III . 検出された遺構と遺物	20
1 . 堅穴住居跡と出土遺物	
2 . 溝跡と出土遺物	
3 . 土坑と出土遺物	
4 . 遺構外出土遺物	
IV . まとめ	24

大寺遺跡

I . 調査に至る経緯	27
II . 基本層序	27
III . 検出された遺構と遺物	27
1 . 堅穴住居跡と出土遺物	
2 . 搾乱、遺構外出土遺物	
3 . 稲荷様の祠付近から出土した土師器壺について	
IV . まとめ	30

報告書抄録

図 目 次

第1図 青野遺跡と周辺の遺跡	第11図 経ヶ崎遺跡、大寺遺跡と周辺の遺跡
第2図 青野遺跡と調査区	第12図 対象地の位置とトレーンチ配置図
第3図 1号住居跡	第13図 W拡張区平面図
第4図 2号住居跡	第14図 1号住居跡出土遺物
第5図 2号住居跡出土遺物（1）	第15図 4号土坑
第6図 2号住居跡出土遺物（2）	第16図 経ヶ崎遺跡住居分布図
第7図 3号溝跡	第17図 調査区の位置と調査区平面図
第8図 2号住居跡出土遺物	第18図 1号住居跡
第9図 2号住居跡における想定されるカマド構築工程	第19図 出土遺物
第10図 カマド燃焼部側壁に掘り方を持つ住居跡	

表 目 次

第1表 2号住居跡出土遺物観察表

写 真 図 版

- 写真図版1 調査区全景（南東から）、調査区全景（北から）、1号住居跡（南から）、1号住居跡カマド（南西から）、2号住居跡（南から）、2号住居跡堆積土中遺物出土状況（南東から）、2号住居跡カマド（南東から）、2号住居跡堆積状況（西から）
- 写真図版2 2号住居跡カマド右脇遺物出土状況（南から）、2号住居跡K1遺物出土状況（北から）、2号住居跡カマド側壁断ち割り状況（南から）、2号住居跡カマド側壁断ち割り状況（北から）、2号住居跡出土遺物
- 写真図版3 遺跡遠景（南東から）、1号住居跡（南東から）、2号住居跡（南から）、3号溝跡（北から）、3号溝跡断面（北から）、4号土坑（北から）、1号住居跡出土遺物
- 写真図版4 調査区（北から）、1号住居跡（北から）、1号住居跡断面（東から）、1号住居跡断面細部（東から）、出土遺物

例 言

1. 本書は、栗原市による青野地区防火水槽建設工事及び民間開発に伴う発掘調査報告書である。
2. 発掘調査から報告書作成にいたる一連の作業は、調査原因となった事業主体者である栗原市総務部（担当：危機管理室）と民間事業主から依頼を受け、栗原市教育委員会が行ったものである。
3. 土層や土器の色調表現は『新版標準土色帳』（小山・竹原編1994、日本色研事業株式会社）に準拠し、土性区分については国際土壤学会に準拠している。
4. 座標は世界測地系を用いている。また、図中にある方位は真北を表している。
5. 調査区全体図は1/100、遺構平面図及び断面図の縮尺1/60とした。また、遺物の縮尺は1/3に統一し、スケールを添えた。なお、断面黒塗りは須恵器を示している。
6. 遺物写真の縮尺は任意である。
7. 発掘調査および本書の作成に際しては下記の方々からご教示・ご指導を賜った。
佐藤則之、須田良平、西村力（宮城県教育庁文化財保護課）
8. 本書の執筆、編集は課員の検討を経て安達訓仁が行った。
9. 調査によって得られた資料は全て栗原市教育委員会（栗原市築館出土文化財管理センター）で保管している。

調査要項

青野遺跡（宮城県遺跡登録番号：41035）

所 在 地 宮城県栗原市築館青野5-18
調査原因 青野地区防火水槽建設事業
調査面積 94 m²
調査期間 確認調査 平成20年5月22日
事前調査 平成21年1月19日～2月13日
調査担当 栗原市教育委員会文化財保護課 安達訓仁（確認・事前）、三浦 実（確認）
発掘調査参加者 小野寺憲治 庄司佳郎 庄司玉夫 栃原孝夫
整理作業参加者 芳賀雅子 星宗久美子
調査協力 (株)東北電力

経ヶ崎遺跡（宮城県遺跡登録番号44004、遺跡記号CF）

所 在 地 宮城県栗原市高清水上京ヶ崎23-5
調査原因 整地及び擁壁設置
調査面積 341.5 m²（対象面積927.29 m²）
調査期間 平成19年3月22、23、26日
調査担当 栗原市教育委員会文化財保護課 安達訓仁 高橋和智 青野圭一
整理作業参加者 芳賀雅子

大寺遺跡（宮城県遺跡登録番号44001）

所 在 地 宮城県栗原市高清水十二神37-4
調査原因 法面掘削
調査面積 55 m²
調査期間 平成20年10月30日、11月5日（確認調査）
平成21年4月2、3日（事前調査）
調査担当 栗原市教育委員会文化財保護課 千葉長彦、大場亜弥（確認調査）、
安達訓仁（事前調査）
発掘調査参加者 小野寺憲治 栃原孝夫
整理作業参加者 芳賀雅子

青野遺跡

I. 調査に至る経緯

青野遺跡は栗原市築館地区に所在する。奥羽山脈から東側に延びる築館丘陵の北側、標高約36mの河岸段丘低位段丘上に立地し、北側には一迫川が東流する。本遺跡は市街地となり、そのほとんどが宅地として利用されている。昭和40年代の住宅造成の際、須恵器蓋と須恵器及び土師器の破片が採集されたことから埋蔵文化財包蔵地として登録された。現在でも住宅地内に点在している畠地内において古代の土師器を採集することができる。

周辺では一迫川や二迫川などの河川流域の丘陵や段丘上に古代の遺跡が多数確認されている。本遺跡の北約3.5kmには国史跡伊治城跡が所在している。これまでの発掘調査により、『続日本紀』にみえる神護景雲元年（767）に律令政府が東北経営のため設置された伊治城であることが確定した（築館町教委1992ほか）。伊治城跡周辺の丘陵では多くの集落が確認されており、伊治城が設置された8世



1：青野遺跡 2：伊治城跡

第1図 青野遺跡の位置と周辺の遺跡

紀後半以降、確認される集落数は大きく増加することが判明している。

青野地区は道幅が狭く、消火栓も少なく、万一手災が発生した場合、初期消火が難しい地域である。このことから、栗原市総務部危機管理室では青野地区に防火水槽の設置を計画した。遺跡内であることから、平成20年4月に宮城県教育委員会、栗原市教育委員会と協議を行い、確認調査を実施することとなった。

確認調査は平成20年5月22日に実施した。工事予定範囲内に幅2mの調査区を2ヶ所設定し、重機を用いて表土を除去し、遺構確認作業を行った。西側で建物の基礎に破壊された竪穴住居跡が1軒、東側で堆積土上部に灰白色火山灰が含まれる古代の竪穴住居跡1軒が確認された。これらの成果を踏まえ、栗原市危機管理室と位置や工法の変更について保存協議を実施した。しかし、位置及び工法変更が難しいことから、平成20年度中に記録保存のための事前調査を実施することとなった。

事前調査は平成21年1月19日から開始した。調査区の設定と器材の搬入を行い、1月20日より重機を用いて表土剥ぎを行い、その後、人力により遺構検出を実施した。これらの作業により、調査区内は以前にあった住宅の搅乱が著しいが、確認調査で確認されていた竪穴住居跡2軒を再検出した。1号住居跡は住宅による搅乱の影響で残存状況がよくないが、2号住居跡では堆積土中より多くの遺物が出土するとともに残存状況が良好であり、さらにカマド構築方法を検討する上で良好な資料を得ることができた。遺構の精査と各種記録作成を行い、2月13日に野外調査を終了した。

出土遺物の水洗いは調査期間中に実施し、引き続きネーミングと接合作業を行った。その後、遺物調書、実測図作成を行った。また、遺構については平面図、断面図の整理を行い、遺構台帳を作成した。報告書を作成し、事業の一切を終了した。

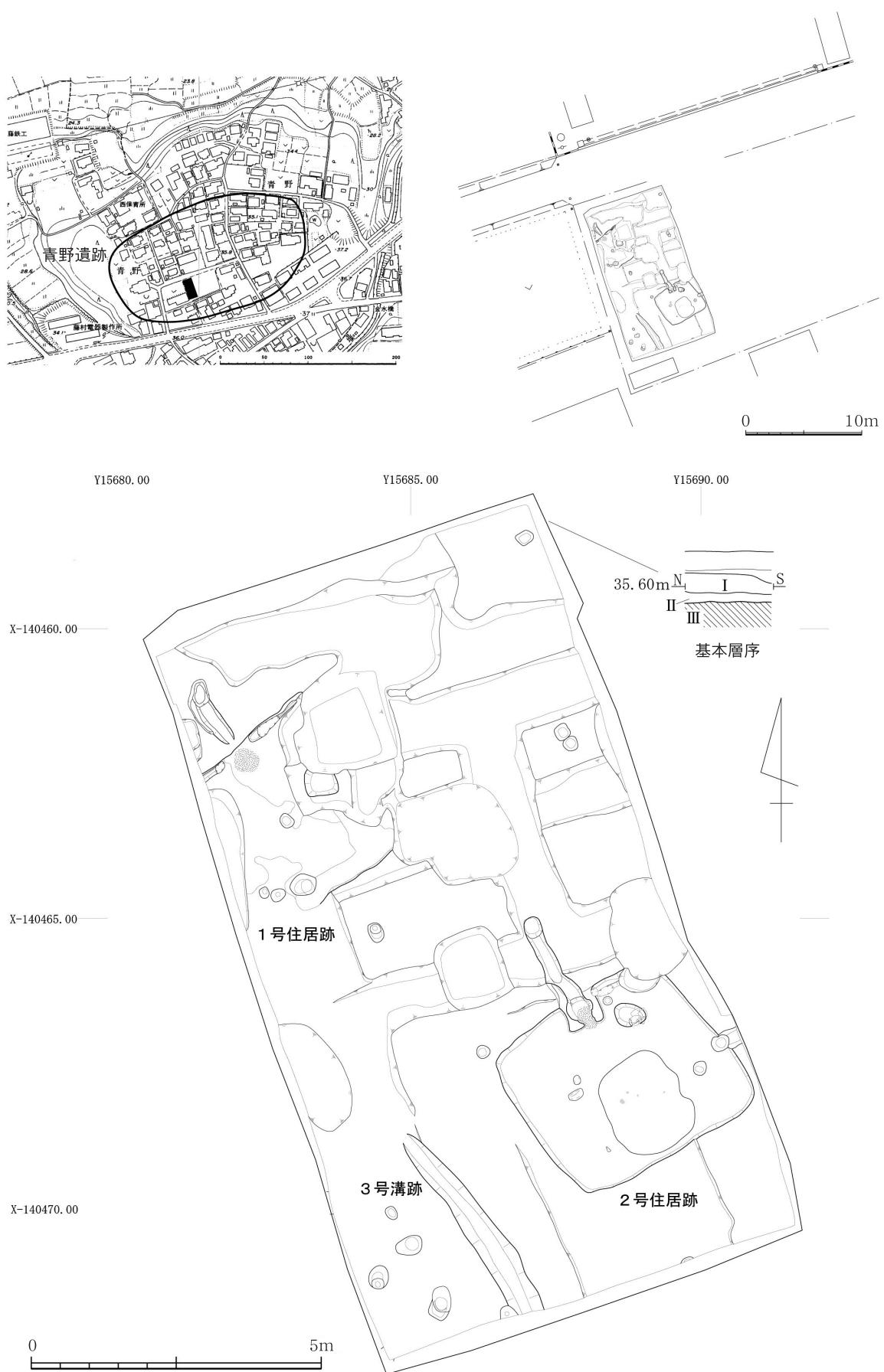
II. 基本層序

本調査区内は駐車場となっている。厚さ0.18mの碎石を除去し、以下の基本層を確認することができた。以前にあった住宅の搅乱により、旧地形や基本層が残存する範囲は調査区北東隅付近や南側の一部であり、搅乱は遺構検出面の直上か遺構検出面より0.2m以上深い状況であった。古代の遺構はⅢ層で確認されたが、掘り込み面について確認できなかった。

I層 黒褐色(2.5Y3/2) 粘土質シルト。調査区全体に分布する。駐車場以前の表土で、耕作土と考えられる。

II層 黒褐色(10YR3/1) 粘土質シルト。住宅基礎の影響を受けなかった部分、地山の標高が高い部分に分布する。特に北東隅付近では残存状況がよい。旧表土と考えられ、3号溝跡の掘り込み面である。

III層 にぶい黄褐色(10YR6/3) 粘土。礫を若干含む。粘性があり、やわく削りにくい。厚さ約0.15cmである。本調査区内での地山であり、古代の遺構の検出面である。この層の下部には明黄褐色(10YR6/6) 粘土層(厚さ0.6m以上)や、搅乱底面ではにぶい黄褐色(10YR7/3) 粘土層も確認された。



第2図 青野遺跡と調査区

III. 検出された遺構と遺物（第4～8図）

検出された遺構は竪穴住居跡2軒、溝跡1条である。遺物は、各遺構から土師器、須恵器、石製品、鉄製品、石器、遺構外から土師器や近世陶器の破片がテン箱で2箱出土している。

1. 竪穴住居跡と出土遺物

【1号住居跡】

調査区北西に位置する。III層で確認された。平面形は北東側、南東側、南西側が搅乱や確認調査トレンチにより破壊されているので明確ではないが、方形と考えられる。東西2.20m以上、南北3.15mである。方向は南辺で計測するとE-35°-N、カマド煙道の芯々延長ラインで計測するとN-35°-Wである。堆積土は南側を中心に3～4cmほど残存していた。細かい地山粒や炭粒を含む黒褐色粘土質シルトで自然堆積とみられる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは南側及び北側で3cmである。床面はほぼ平坦であるとみられる。南東側や北西側では掘り方埋土、その他では地山を床としていると考えられるが、竪穴中央から西側にかけて厚さ0.02～0.05mの貼床あるいは地山の汚れが、また、竪穴中央南よりでは人為的に埋め戻された土坑状の落ち込みが確認された。土坑状の落ち込みの規模は長軸0.70m、短軸0.62m、深さ0.13mである。南東部分の掘り方は壁沿いにL字形にめぐるもので、幅0.36～0.60m、深さは0.05～0.20mである。小規模な土坑状の落ち込みを連続して掘り込んでいると考えられる。それぞれの土坑状の落ち込みの底面はほぼ平坦あるいは皿型であり、壁は急に立ち上がる。掘り方及び土坑状の落ち込みの堆積土は細かい地山粒や地山小ブロック、炭粒を含む灰黄褐色粘土質シルトであり、人為的に埋め戻される。

カマドは北辺中央で確認された。燃焼部と煙道部からなる。燃焼部では楕円形の焼面が確認されたが、カマド側壁は残存していない。焼面は長軸0.42m、短軸0.40m、厚さ0.07mである。奥壁部分で約0.02mの段差をもつ。煙道部は長さ0.80m、幅0.29mであり、煙道部北側に向かい傾斜する。断面形は底面がほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。壁面の一部でわずかに焼面が確認された。最も深い部分で深さ0.13mである。煙出ピットは木の根による搅乱のため確認できなかった。カマド部分を除く北辺で周溝が確認された。東側で長さ0.96m、西側で長さ0.27m以上、幅は0.07～0.16mである。断面形はU字形で、深さは0.07mである。堆積土は細かい地山粒を含む褐灰色粘土質シルトであり、自然堆積と考えられる。また、東側の搅乱でK1が確認された。竪穴中央のやや東よりに位置し、平面形は隅丸長方形である。長軸0.56m、短軸0.40m以上で、堆積土は地山粒や炭粒を含む黒褐色粘土質シルトである。堆積土は0.07m残存していたが、西側の搅乱を受けていない床面から計測すると深さは0.22mである。堆積土が住居のものと類似することから1号住居跡に伴うものと考えられる。また、南西部でP1が確認された。柱穴の平面形は不正方形で、規模は長軸0.45m、短軸0.36m、深さ0.13mである。埋土は黒褐色粘土質シルトや明黄褐色粘土である。抜き取り痕跡は径0.22～0.26mの楕円形である。堆積土は地山ブロックを多く含む黒褐色粘土質シルトである。柱穴の深さか

ら住居の主柱穴とは考えられず、また、位置関係から1号住居跡に伴うものではないものとみられる。

遺物は掘り方から土師器甕体部破片、P1抜き取り痕跡から須恵器坏口縁部破片、土師器坏口縁部破片が出土している。土師器はいずれも製作にロクロを用いないものであり、坏は外面横ナデ、内面ヘラミガキ・黒色処理が施され、甕は外面ヘラミガキ、ヘラケズリ、内面にナデが施されている。小



層	土色	土性	含有物ほか	
1	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト 細かい地山粒、炭粒を若干含む	堆
2	褐色	7.5YR4/3	粘土質シルト 細かい地山粒をまばらに、焼土・炭粒を微量含む。	カマド煙道
3	黒褐色	10YR3/1	粘土質シルト 径2cm大の地山小ブロック、細かい地山粒をまばらに、径3~5cm大の地山ブロックを若干、炭粒・焼土を微量含む。	カマド煙道
4	黒色	10YR2/1	粘土質シルト 径2cm大の地山小ブロック、細かい地山粒をまばらに、炭粒を微量含む。	カマド煙道
5	焼土層			カマド燃焼部
6	褐灰色	10YR4/1	粘土質シルト 細かい地山粒を含む。自然	周溝
7	黒褐色	10YR2/2	粘土質シルト 地山粒、炭粒をまばらに含む。	K 1
8	黒褐色	10YR3/1	粘土質シルト 地山ブロックを多く、炭粒をまばらに含む。	P 1抜き取り
9	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト 細かい地山粒をまばらに含む。	P 1掘り方
10	明黄褐色	10YR7/6	粘土 黒褐色粘土質シルト粒をまばらに含む。	
11	灰黄褐色	10YR4/2	粘土質シルト 細かい地山粒、径2cm大の地山ブロックを多く、炭粒を若干含む。	貼り床
12	灰黄褐色	10YR4/2	粘土質シルト 細かい地山粒、径3~5cm大の地山ブロックを多く、炭粒を若干含む。	掘り方

第3図 1号住居跡

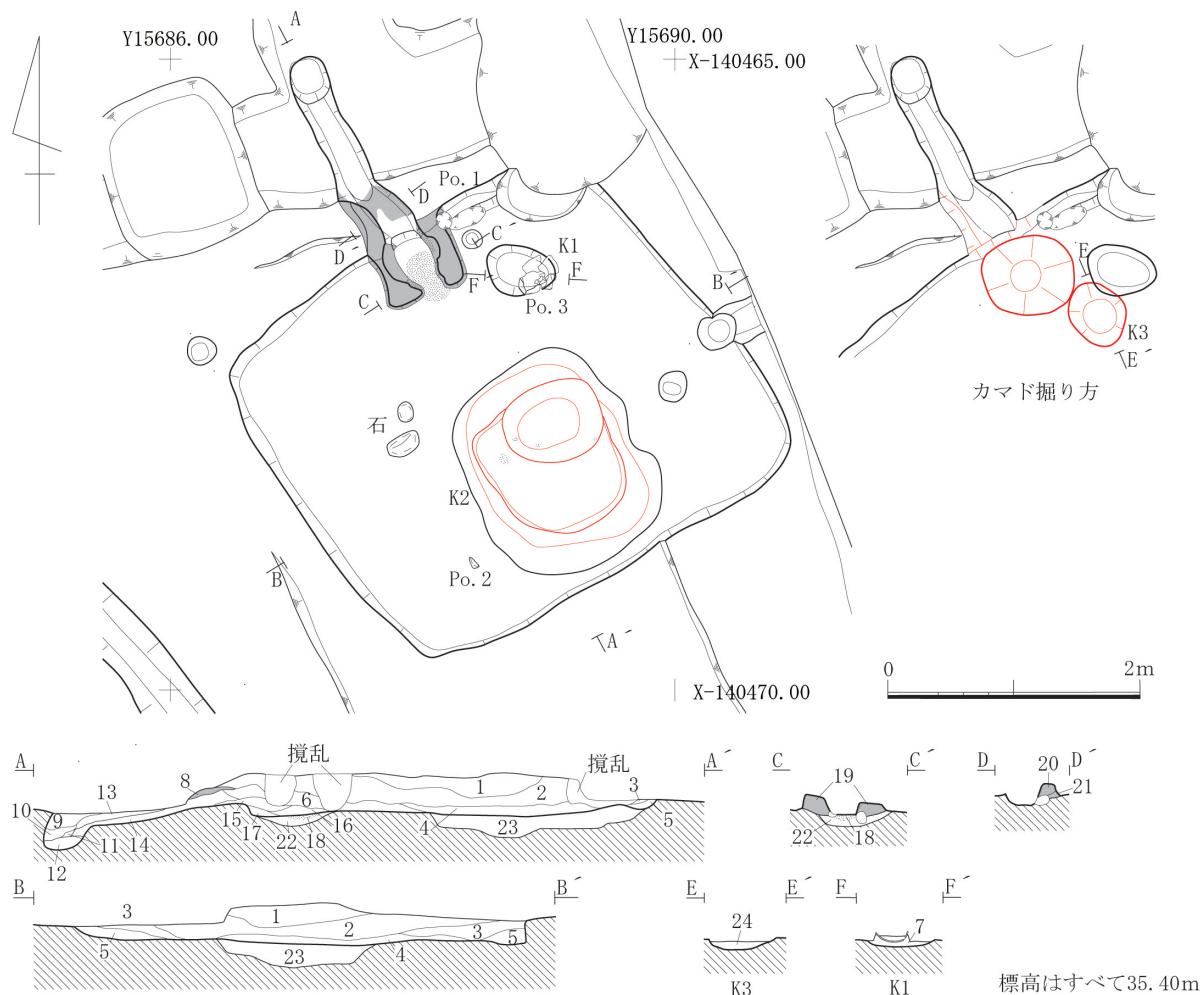
片のため図示できない。

【2号住居跡】

調査区南東に位置する。III層で検出された。平面形は北東隅を搅乱により破壊されるが、隅丸方形である。北辺が短いため歪んでいる。東西3.58m、南北3.20mである。方向は西辺で計測するとN - 35° - Wである。堆積土は大別3層が確認された。I層は灰白色火山灰ブロックを含む黒褐色粘土質シルト、II層が灰黄褐色粘土質シルトや黒褐色粘土質シルト、III層が壁際に認められる黒褐色粘土質シルトである。レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と考えられる。堆積土中や床面上では炭粒がやや多く確認された。壁はほぼ垂直に立ち上がるもので、最も残りのよい北辺や東辺では高さ0.18m残存している。床面は地山を床としているが、竪穴中央付近は地山ブロックを多量に含む黒褐色粘土質シルトにより人為的に埋め戻されており、上面は中央に向かいやすくぼむ(K2)。平面形は橢円形であり、長軸1.70m、短軸1.28mである。壁は急に立ち上がり、底面は凹凸がある。深さは0.26mである。人為堆積層の上面では焼け面が4ヶ所で確認された。カマド右前面でK3が確認された。平面形は橢円形であり、長軸0.54m、短軸0.42mである。断面形は皿形で、深さは0.06mである。堆積土は地山ブロックを多く含む黒褐色粘土質シルトであり、人為的に埋め戻されている。焼土や炭化物は含まれないことから住居機能時は機能していないと考えられる。

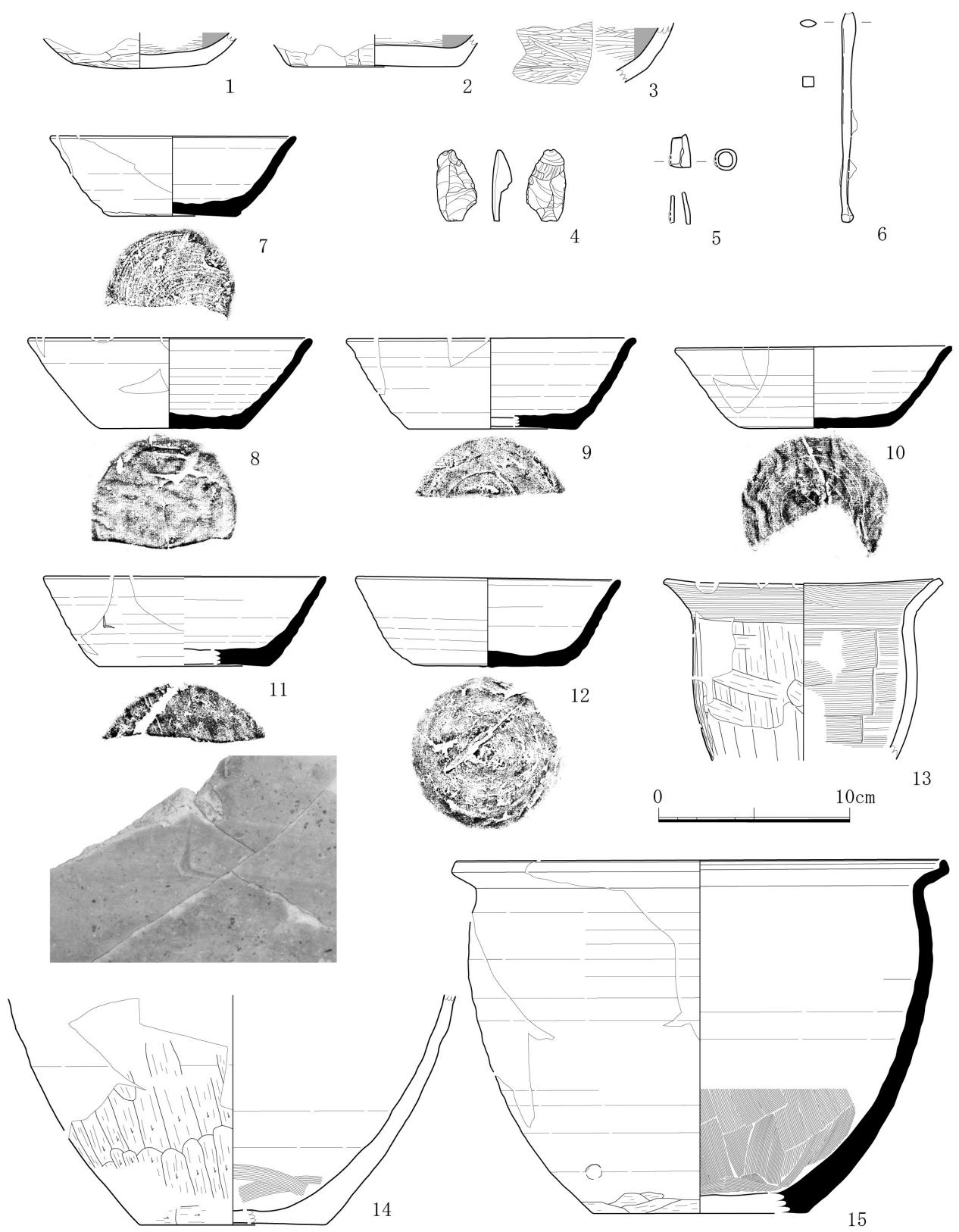
カマドは北辺中央で確認された。燃焼部と煙道部からなる。カマド本体は竪穴内部に粘土を貼り付けて造られた造り付けのカマドである。燃焼部では側壁が確認された。長さ0.54m、焚口付近の幅0.17m、奥壁部分の幅0.25mである。焚口部が狭く、奥壁に向かいやすくなるものである。焚口付近で焼面が確認された。長さ0.44m、厚さは0.05mである。奥壁部分は0.06mの段差をもつ。側壁は黄灰色粘土、天井部はにぶい黄褐色粘土により構築されており、焚口付近で高さ0.11m、奥壁付近では0.17m残存している。カマド西側では竪穴を越えて煙道側壁の一部と天井部がにぶい黄褐色粘土により構築されていた。竪穴外の地山面からは高さ0.10mである。カマド東側部分の竪穴外では黄褐色粘土は確認されなかった。また、カマド燃焼部の下部から径0.72～0.74m、深さ0.12mの橢円形の落ち込みが確認された。堆積土は地山ブロックを多く含む黄灰色粘土質シルトである。人為的に埋め戻されており、カマド構築に伴う掘り方と考えられる。煙道部は長さ1.60m、幅0.29mであり、煙出ピットに向かい傾斜する。底面は平坦で、壁はやや急に立ち上がる。住宅の搅乱のため確認された深さは最も深い部分で0.10mである。上面は地山と類似する黄褐色土であり、煙道部天井崩落土と考えられる。煙出ピットは径0.30～0.36mの橢円形で、深さは0.30mである。床面上で主柱穴や周溝は確認されなかった。カマド前面右脇でK1が確認された。平面形は橢円形であり、長軸0.56m、短軸0.40mである。底面はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がる。深さは0.06mである。堆積土は細かい地山粒や炭粒を多く含む黒褐色粘土質シルトであり、底面よりやや浮いた状況で体部から底部にかけての土師器甕が横位で確認された。

遺物は床面上から須恵器坏、K1より土師器甕、カマド内堆積土より支脚に用いられたとみられる小型の土師器甕、カマド右脇のカマド崩壊土とみられる焼土が含まれる黄褐色粘土上より須恵器坏が出土した。また、堆積土より土師器坏、鉢、甕や須恵器坏、高台付坏、甕、鉢、石製品、鉄製品、碗

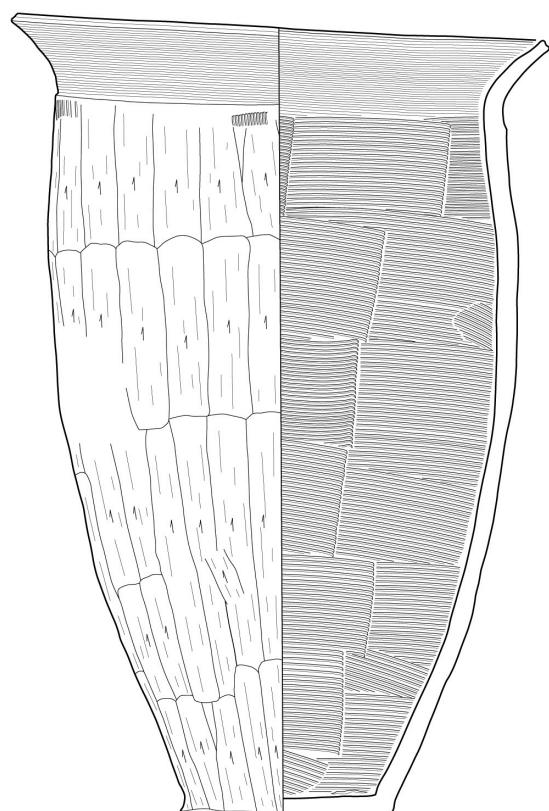


層	土色	土性	含有物ほか	
1	黒褐色 10YR3/1	粘土質シルト	灰白色火山灰ブロック(径3~10cm大)をまばらに、細かい地山粒、炭粒を若干含む。	堆①上層
2	灰黄褐色 10YR4/2	粘土質シルト	細かい地山粒、炭粒をやや多く含む。	堆②上層
3	灰黄褐色 10YR4/2	粘土質シルト	細かい地山粒、径2cm大的地山ブロック、径0.5cm大的炭粒を若干含む。	中央堆上層
4	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト	細かい地山粒、径0.5cm大的地山粒を多く含む。	堆②上層
5	黒褐色 10YR3/1	粘土質シルト	細かい地山粒、径0.5cm大的地山粒を多く含む。	壁際
6	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土質シルト	細かい地山粒、炭粒が多く、白色粘土小ブロック(天井崩落土起源)を若干含む。	カマド上層
7	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト	細かい地山粒、炭粒を多く含む。	K 1
8	にぶい黄褐色 10YR6/4	粘土	白色粘土小ブロックを含む。	カマド天井構築土か崩壊土
9	黒褐色 10YR3/1	粘土質シルト	細かい地山粒を多く、焼土、炭粒、炭化材をまばらに含む。	カマド煙出ピット
10	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト	細かい地山粒を多く、地山小ブロック、炭粒を若干含む。	カマド煙出ピット
11	黒色 10YR2/1	粘土質シルト		カマド煙出ピット
12	黒褐色 10YR3/1	粘土質シルト	細かい地山粒を多く含む。	カマド煙出ピット機能時
13	にぶい黄褐色 10YR5/3	粘土	暗褐色粘土質シルトを多く、黒色土粒、炭粒、焼土粒をまばらに含む。	カマド煙道天井崩落土
14	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	にぶい黄褐色粘土粒、黄褐色粘土小ブロック、にぶい黄褐色粘土小ブロックをまばらに、炭粒をまばらに含む。	カマド煙道機能時
15	灰黄褐色 10YR4/2	粘土質シルト	細かい地山粒、焼土粒をやや多く含む。	カマド燃焼部
16	にぶい黄褐色 5YR5/4	粘土質シルト	焼土を多く含む。	カマド燃焼部
17	黒褐色 10YR3/1	粘土質シルト	細かい地山粒、炭粒を多く、焼土粒をまばらに含む。	カマド燃焼部機能時
18	焼土層		部分的に硬くしまる。	カマド機能時
19	黄灰色 2.5Y4/1	粘土質シルト	焼土小ブロック、白色粘土、地山ブロックを含む。	カマド側壁構築土
20	にぶい黄褐色 10YR6/4	粘土	白色粘土小ブロックを含む。	カマド側壁構築土
21	にぶい黄褐色 10YR5/4	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む。	カマド側壁構築土
22	黄灰色 2.5Y5/1	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む。	カマド堀り方
23	黒褐色 10YR3/1	粘土質シルト	地山ブロックを多く、地山小ブロックをまばらに含む。上面に炭を顕著に含む。	K 2
24	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む。人為。	K 3

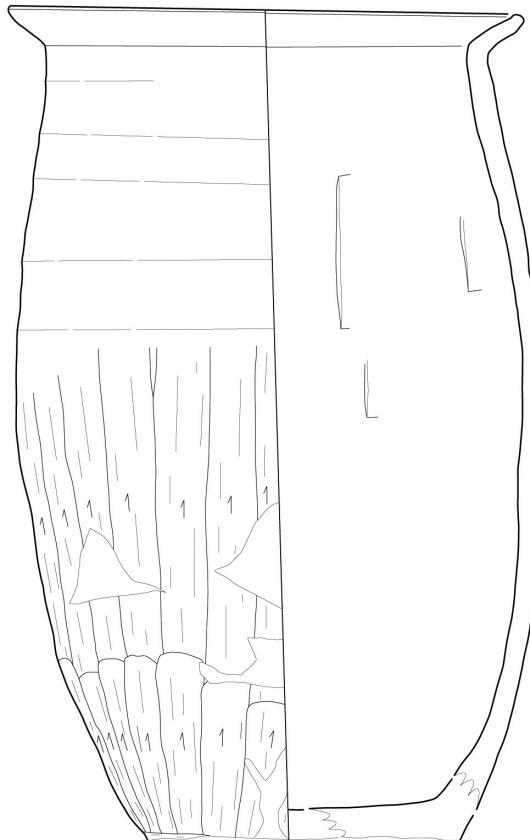
第4図 2号住居跡



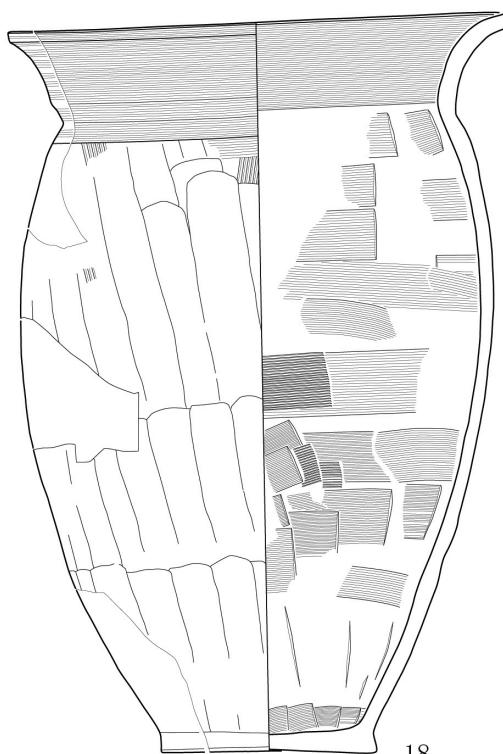
第5図 2号住居跡出土遺物（1）



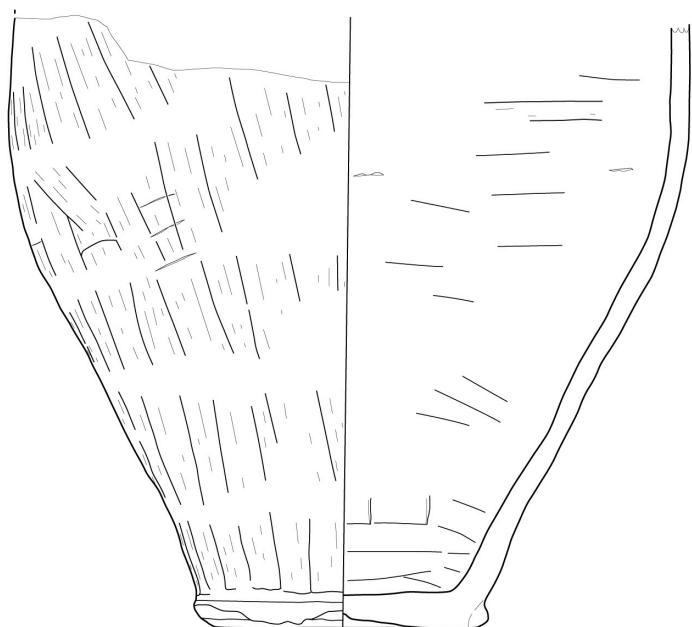
16



17

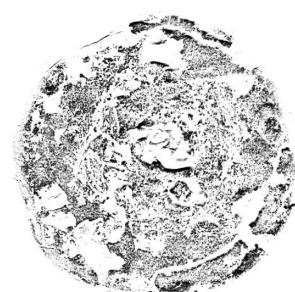


18



19

0 10cm



第6図 2号住居跡出土遺物（2）

第1表 2号住居跡出土遺物 観察表

番号	遺構層	種別	器種	特徴	写真
1	堆積土	土師器	壺	残存：体部～底部片。器高1.5cm残存。底径6.8cm。外面：手持ちヘラケズリ。浅黄橙色(10YR8/3)。底部：手持ちヘラケズリ。内面：ヘラミガキ・黒色処理。黒色(10YR2/1)。	—
2	検出面	土師器	壺	残存：体部～底部片。器高1.2cm残存。底径8.6cm。外面：手持ちヘラケズリ。褐灰色(10YR5/1)～にぶい黄橙色(10YR7/2)。底部：切り離し不明→手持ちヘラケズリ→ヘラミガキ。内面：ヘラミガキ・黒色処理。黒色(N2/0)。製作にロクロを用いるとみられる。	—
3	検出面	土師器	壺	残存：体部。外面：ヘラミガキ。にぶい黄橙色(10YR7/4)。内面：ヘラミガキ・黒色処理。黒色(10YR1.7/1)。長さ1.9cm。幅1.0cm。厚さ0.5cm。黒曜石製。両極剥離。	—
4	堆積土	石製品	剥片	円筒形。残存する長さ1.7cm。幅1.0～1.1cm。	2-13
5	堆積土	鉄製品	不明	残存：ほぼ完形か。長さ11.2cm。茎部：断面四角形。幅0.6cm、厚0.5cm。鎌身部：断面鉢型。幅0.6cm。幅0.4cm。	2-14
6	堆積土	鉄製品	鉄鎌	残存：1/4。器高4.2cm。口径12.6cm。底径6.5cm。外面：ロクロナデ。灰色(N5/0～N4/0)。底部：回転糸切りの後周縁部をナデ。内面：ロクロナデ。灰色(N5/0)。内面上部及び底部縁辺が使用による摩滅。	2-12
7	堆積土上層	須恵器	壺	残存：1/2。器高5.1cm。口径14.7cm。底径7.3cm。外面：ロクロナデ。底部付近手持ちヘラケズリ。灰白色(5Y8/1)。底部：ケズリか。内面：ナデの後ロクロナデ。灰白色(5Y8/1)。内面下部及び底部が使用による摩滅。外面に火ダスキー。内面の一部に火ダスキー。	—
8	堆積土	須恵器	壺	残存：1/3。器高4.7cm。口径15.0cm。底径8.8cm。外面：ロクロナデ。灰白色(7.5Y7/1)。底部：回転ヘラ切り。内面：ロクロナデ。灰白色(7.5Y7/1)。内面上部及び底部縁辺が使用による摩滅。外面に火ダスキー。内面の一部に火ダスキー。	2-3
9	堆積土	須恵器	壺	残存：1/3。器高4.2cm。口径14.4cm。底径8.0cm。外面：ロクロナデ。灰白色(10YR8/1)～黒褐色(10YR3/1)。	2-2
10	B床直上、堆積土	須恵器	壺	底部：回転ヘラケズリ。焼成前刻畫「×」。内面：ロクロナデ。灰白色(10YR8/1)～黒褐色(10YR3/1)。残存：1/5。器高4.7cm。口径14.6cm。底径9.0cm。外面：ロクロナデ。灰色(10Y8/1)～灰白色(5Y8/1)。	2-3
11	床面直上 Po3	須恵器	壺	底部：切り離し不明の後手持ちヘラケズリ。内面：ロクロナデ。灰白色(5Y8/1)。内面上部に使用による摩滅。	—
12	カマド右脇 黄褐色土上 Po2	須恵器	壺	残存：完形。器高4.7cm。口径13.7cm。底径8.0cm。外面：ロクロナデ。灰白色(5Y8/1)。口縁部付近は灰色(5Y5/1)。底部：回転ヘラ切りの後周縁部をナデ。内面：ロクロナデ。灰色(5Y5/1)。内面上部及び底部縁辺が使用による摩滅。外面に火ダスキー。内面の一部に火ダスキー。内面上部及び外面底部付近、底部に使用による摩滅。内面上部に使用による摩滅。	2-1
13	カマド内 堆積土、 住居堆積土	土師器	甕	残存：底部欠損。口径14.0cm。器高9.5cm残存。外面：横ナデ、ヘラケズリ。にぶい橙色(5YR6/4)。内面：横ナデ、ヘラナデ。灰白色(7.5Y8/1)～黒褐色(7.5Y3/1)。外面の一部に火熱による焼けはじけがみられる。	2-5
14	堆積土	土師器	甕	残存：体部～底部。器高12.0cm残存。底径9.6cm。外面：ロクロナデ、ヘラケズリ。にぶい橙色(7.5YR7/4)。底部：摩滅。内面：ロクロナデ。横ナデ。にぶい橙色(7.5YR7/4)	2-7
15	堆積土	須恵器	鉢	残存：1/3。器高18.4cm。口径25.2cm。底径11.0cm。外面：ロクロナデ。灰色(7.5Y5/1)。底部：切り離し不明の後手持ちヘラケズリ。内面：ロクロナデ。灰白色(5Y7/1)。内面上部及び底部縁辺が使用による摩滅。外面に火ダスキー。内面の一部に火ダスキー。	2-6
16	堆積土	土師器	甕	残存：完形。器高30.8cm。口径20.8cm。底径：8.4cm。外面：横ナデ。ハケメ→ヘラケズリ。にぶい黄橙色(10YR8/1)。底部：ヘラケズリ。内面：横ナデ。ハケメ。灰白色(10YR8/1)。	2-9
17	堆積土	土師器	甕	残存：3/5。底部欠損。器高22.4cm残存。口径20.4cm。外面：横ナデ、ヘラナデ、ヘラケズリ。にぶい黄橙色(10YR6/4)。底部：剥離。内面：ロクロナデ。ヘラナデ。黒褐色(10YR3/1)～にぶい黄橙色(10YR7/3)。	2-11
18	堆積土	土師器	甕	残存：3/5。器高28.5cm。口径19.8cm。底径8.4cm。外面：ロクロナデ、ヘラケズリ。浅黄橙色(10YR8/3)～灰黃褐色(10YR5/2)。底部：木葉痕。内面：横ナデ。ヘラナデ。磨滅。灰白色(10YR8/2)。	2-10
19	K1Po1	土師器	甕	残存：体部～底部。器高24.4cm残存。底径10.0cm。外面：ヘラケズリ。灰白色(10YR8/1)。底部：木様痕、縁辺を手持ちヘラケズリ。内面：ナデ。ヘラケズリ。灰白色(10YR8/1)。	2-8

型滓が出土した。豎穴の壁際からの出土は少なく、中央から東側にかけて出土量が多い。

須恵器壺の底部切り離しは確認できるものは回転ヘラ切りであり、回転ヘラケズリ、手持ちヘラケズリやナデにより再調整されるものが多い。また、回転糸切りのものが1点出土している。色調、胎土をみると、灰白色で火ダスキーがあるものと白色で火ダスキーがなく軟質のものがある。高台付壺は、残存状況はよくないが足高のものである。土師器壺は全体の器形が不明ではあるが、製作にロクロを用いたとみられる平底のものと製作にロクロを用いない丸底に近いものがある。鉢とみられる底部破片は外面や底部は手持ちヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。甕では製作にロクロを用いるものと用いないものがあり、製作にロクロを用いないものでは、口縁部は横ナデ、体部外面はヘラケズリやハケメ、内面はハケメやヘラナデが施され、頸部に段や稜を持つものがある。口縁部の断面形態は製作にロクロを用いるものと用いないものいずれも平坦であり、沈線状に窪むもの

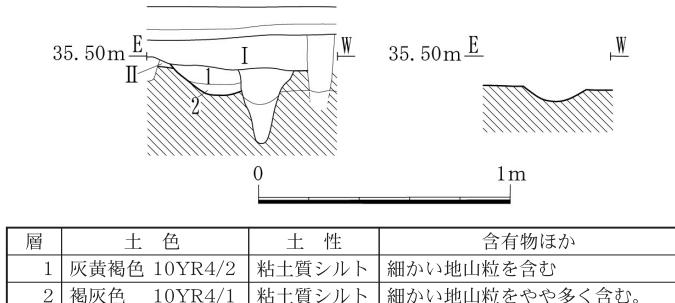
もある。

2. 溝跡と出土遺物

【3号溝跡】

調査区南西側に位置する。III層で検出されたが、断面観察の結果、II層から掘り込まれていることが確認された。ピットと重複し、これより古い。長さ3.76mが確認され、調査区南側に続く。北側に続くかどうかは住宅基礎などにより破壊されているので不明である。上幅は0.40～0.60mであり、深さは最も深い南側で0.24mである。堆積土は細かい地山粒を含む灰黄褐色粘土質シルトや褐灰色粘土質シルトであり、自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。



第7図 3号溝跡

3. 遺構外出土遺物

根穴とみられるピット、搅乱部分、廃土から土師器坏とみられる体部破片、甕の頸部破片や体部破片が出土している。坏とみられる体部破片は内外面ともに摩滅しており、内面は黒色処理が残存する。甕の頸部破片は内外面ともに横ナデが施され、外面では段がみられる。体部破片は、外面がヘラケズリ、内面はナデが行なわれている。いずれも小片のため図示できない。

IV. 考察

今回の調査で確認された遺構は竪穴住居跡2軒、溝跡1条である。ここでは、竪穴住居跡について検討を加える。

1. 竪穴住居跡の年代について

確認された竪穴住居跡2軒の年代について個別に検討を行う。

【2号住居跡】

2号住居跡からは多くの遺物が出土した。出土状況をみると床面及びカマド内、床面の施設から出土した遺物と堆積土出土遺物に分けられる。堆積土出土遺物は竪穴中央付近の床面直上や各堆積土から出土したものが接合し、完形に近い形に復元できた。一方、壁際に堆積する住居廃絶後の初期堆積土からは遺物は出土しない状況であった。このことから、竪穴中央付近の床面直上及び堆積土から出土した遺物は、住居廃絶後に壁際に初期堆積土が堆積した後に形成された窪地に廃棄された遺物とみられる。また、住居構築時のものとみられる遺物も出土しなかった。このことから、2号住居跡出土遺物は住居機能時から廃絶時の遺物と住居廃絶後の遺物に大別できると考えられるが、須恵器壺の特徴が類似することから住居機能時から廃絶時と廃絶後の遺物の年代幅は近接したものと考えられる(第8図)。ここでは、出土遺物の特徴を記した後に住居跡の年代について検討を行う。

《須恵器》

壺はやや丸底風になるものや体部に膨らみをもつものもあるが、底部から口縁部にかけて直線的に開きながら立ち上がる逆台形の器形である。口径と底径の比率をみると50パーセントを超える底径の大きく深い器形である。底部切り離しは回転ヘラ切りのものと回転糸切りのもの、不明のものがあり、回転ヘラケズリ、手持ちヘラケズリないしはナデによる再調整が行われるものがある。

鉢は口縁部に最大径をもつものである。体部から頸部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁部が大きく外傾し、口唇部は直立するものである。

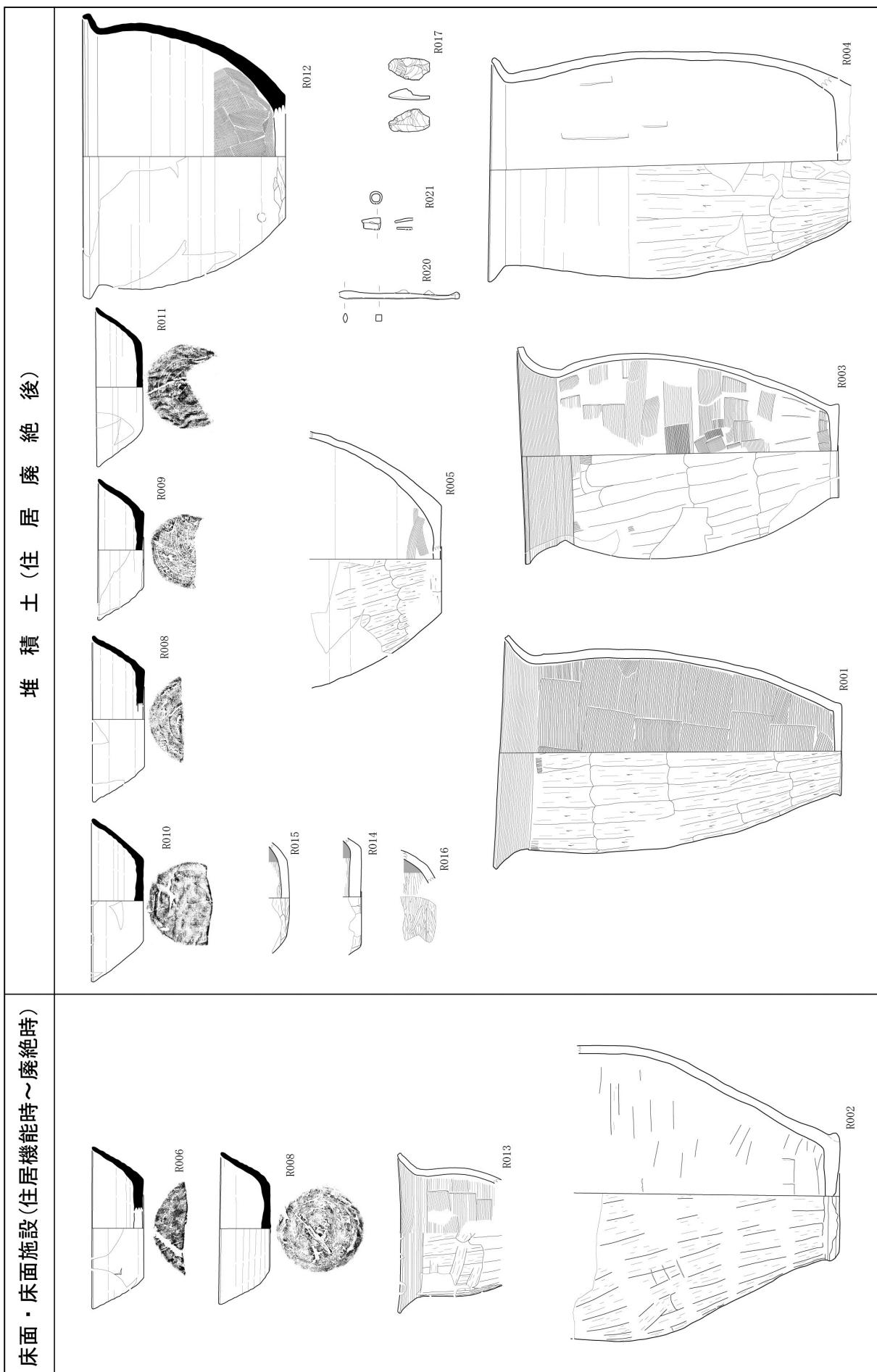
《土師器》

土師器は壺、甕(小型、大型)が出土しており、製作にロクロを用いるものと用いないものがある。

壺は破片で全体の形状が分かることはない。製作にロクロを用いられたとみられる平底のものと製作にロクロを用いていないとみられる丸底風でケズリ調整が施されるものや外面がミガキ調整され、体部に軽い稜を持つものがある。

甕は大型ものと小型のものがあり、製作にロクロが用いられるものと用いられないものがある。製作にロクロを用いる甕は大型のもので、底部から頸部に向かいすぼまり、口縁部が大きく外傾ものである。大型のもので製作にロクロが用いられない甕はいずれも頸部に段ないしは稜をもつ。体部上半から底部に向かいすぼまるものと中央がふくらむものがある。また、小型の甕も製作にロクロが用いられないものであり、頸部に稜を持ち、体部上部から底部に向かいすぼまる器形と推定される。

第8図 2号住居跡出土遺物



《鉄製品》

鉄鏸と不明製品が各 1 点ある。鉄鏸は両刃で、茎部は断面四角形とみられる。不明製品は円筒状のものである。

《石製品》

黒曜石製の剥片が 1 点ある。黒曜石は透明のものである。両極剥離とみられる。

《2号住居跡の年代》

住居機能時から廃絶時とみられる遺物には須恵器壺、土師器の甕では大型のものと小型のものがあり、住居跡廃絶後の遺物には土師器壺、甕（大型）、須恵器壺、鉢がある。また、破片のため実測図は作成できなかったが土師器では鉢とみられるもの、須恵器では甕や足高の高台付壺が出土している。

青野遺跡 2 号住居跡出土遺物と類似する特徴をもつ土器群としては伊治城跡 SI04 住居跡出土遺物（宮多研 1978）があげられる。伊治城跡 SI04 床面、堆積土 2 層出土遺物より製作にロクロを用いた土師器長胴甕や製作にロクロを用いない土師器大型鉢、外面にミガキ調整される有段丸底の土師器壺、製作にロクロ調整される土師器壺とともにヘラ切り無調整、手持ちヘラケズリ再調整が行われる須恵器壺がみられる。堆積土 1 層から回転糸切りの須恵器壺が出土している。SI04 出土の須恵器壺は器形では丸底に近いものや口縁部が外反するもの、底部から直立して立ち上がるものがあり、深さは深いものと深くないものなどがあるが、いずれも底径が大きいものである。伊治城跡 SI04 住居跡出土遺物と青野遺跡 2 号住居跡出土遺物は器形や法量ともに近似するものが多く、土器組成が類似しているが、青野遺跡 2 号住居跡では土器組成から須恵器壺蓋、土師器大型鉢を欠いている。伊治城跡 SI04 出土遺物は宮城県北部・沿岸部における土器編年では 8 世紀末葉から 9 世紀初頭頃（八段階）に位置付けられており（佐藤敏幸 2007）、青野遺跡 2 号住居跡出土遺物の年代も同様に 8 世紀末葉から 9 世紀初頭頃のものと考えられる。また、8 世紀後半頃の在地集団の集落と考えられている糠塚遺跡と比べると、須恵器の保有が格段に多く、さらに供給される須恵器も伊治城跡出土遺物と極めて類似しており、伊治城跡に近い土器組成であると考えられる。

【1号住居跡】

1 号住居跡からは製作にロクロを用いない土師器がわずかに出土しているのみである。古代のものと考えられるが、詳細な年代は不明である。

2. 壇穴住居跡の構造と問題点について

確認された 2 軒の壇穴住居跡はいずれも長軸が 3.0～3.5m、想定される床面積は約 11.5 m² であり、小型の住居である。主柱穴は確認されない。カマドは北辺中央に位置している。また、カマド奥壁と煙道では段差を持ち、煙道部では煙出ピットに向かい傾斜するという共通した特徴を持つ。さらに壇穴住居跡は 2 軒ともほぼ同一の方向をもつものである。

一方、異なる特徴として、1 号住居跡では南辺や壇穴中央に掘り方あるいは貼床を持ち、2 号住居跡ではカマド本体を構築する以前に掘り方を持つとともに壇穴中央から南側にかけて楕円形の掘り方を持つことがあげられる。2 号住居跡では壇穴中央以外は地山を床としている。床面中央に位置する

楕円形の掘り方の性格は明確ではないが、上面では焼け面が確認されており、住居跡堆積土中からは碗型溝が出土している。同様の掘り方は鍛冶関連にかかわると推定されている桃生田前遺跡4号住居跡（瀬峰町教委2000）においても確認されており、防湿などの機能をもつ掘り方であることが想定される。

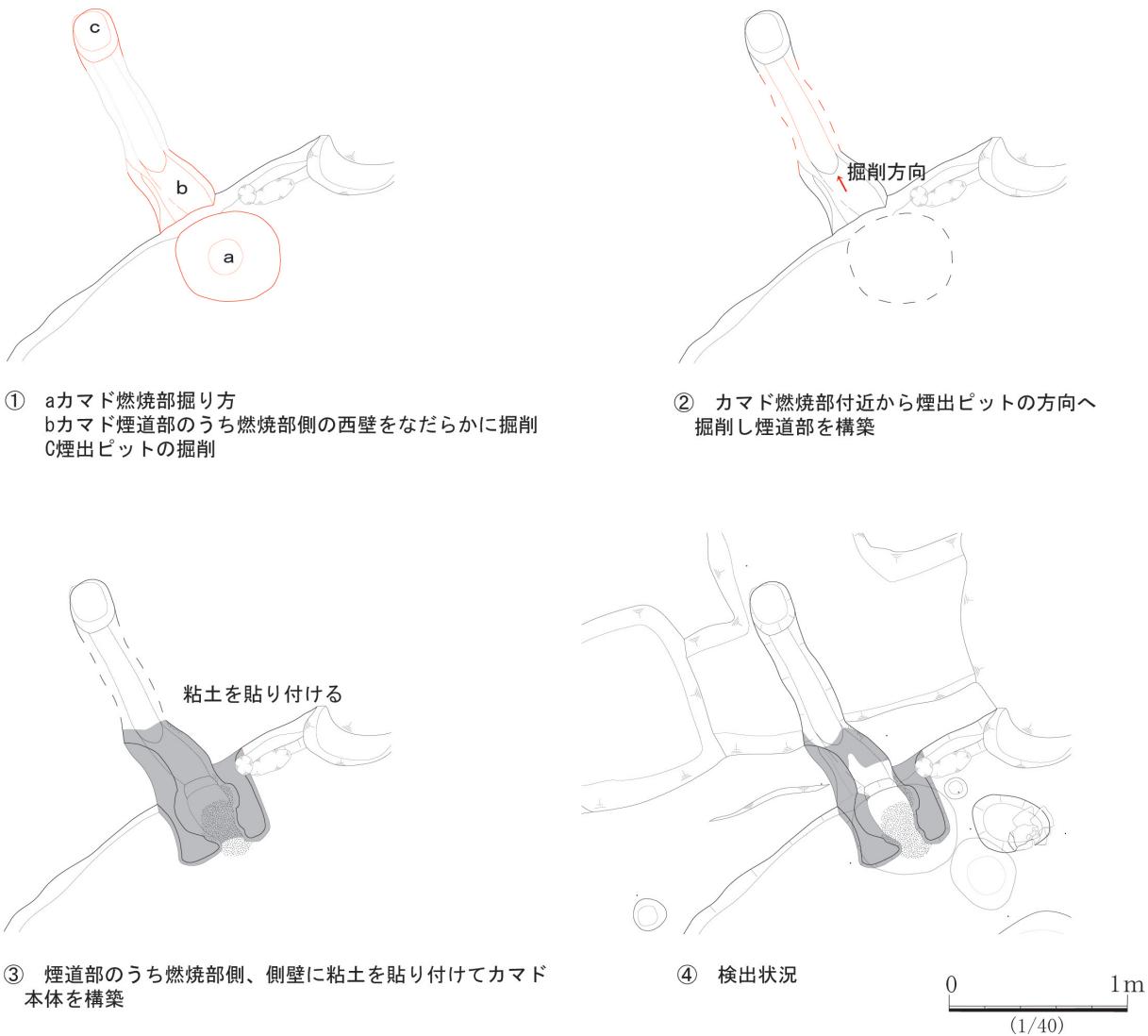
2軒の住居跡は構造の細部については異なる点が認められるが、北カマドであること、小規模であることなど共通した特徴を持つ。このことから2軒の住居跡は齊一性が高いものであり、同時に存在したかどうかは明確ではないが、極めて近接した時期に営まれた可能性が考えられる。

3. 2号住居跡のカマド構築方法と問題点について

2号住居跡で確認されたカマドは、燃焼部と煙道部からなり、燃焼部は竪穴内部に構築されている。構造は宮城県内で確認される煙道の長いタイプのものである。一方、他の竪穴住居跡とは異なる特徴も確認された。カマド煙道部西壁のうち、燃焼部に近い約1/3は黄褐色粘土を貼り付けて構築されている。東側の壁面には貼り付けされていない。貼り付けられた西側の側壁と竪穴外の西側及び東側の地山を比較すると、貼り付けられた西側の側壁が6～8cmほど高いものである。また、煙道部の焼成部側では天井構築土あるいは崩壊土が確認されている。これらのことから西側の側壁に粘土を貼り付けた部分の地山を斜位に削り、粘土を貼り付け、側壁及び天井を構築したと考えられる。2号住居跡におけるカマド構築の工法は以下のように想定することが出来る（第9図）。

- ① (a) 竪穴内部のカマド燃焼部部分を土坑状に掘りくぼめ埋め戻しを行なう（燃焼部掘り方）。
(b) カマド煙道部西壁部分から天井（天井構築土あるいは天井崩落土）が確認された範囲の地山をなだらかに削る。
(c) 煙出ピット部分を掘削する。なお、(a)と(b)はカマドの粘土貼り付け以前と考えられるが前後関係は不明である。
- ② 掘削したカマド煙道部のうち燃焼部に近い部分（①(b)）から煙出ピット（①(c)）に向かいトンネル状に掘削して、煙道部を構築する。なお、①(b)と①(c) 双方向から掘削する可能性もありうるが、双方から掘削した場合、煙道部において食い違いが確認される可能性がある。
2号住居跡の煙道部では食い違いは確認されないので一方向からの掘削を想定しており、作業スペースの確保や作業効率の点から①(b)からの掘削を想定した。
- ③ 竪穴内部にカマド燃焼部の側壁や煙道部の天井部に粘土を貼り付け、カマドを構築した。
という工程である。

県内で確認された煙道部及び燃焼部に掘り方を持ち、粘土を貼り付けてカマドを構築している例として伊治城跡SI357（築館町教委1995）、名生館官衙遺跡SI1357（古川市教委）があるが、これらはカマド煙道及び煙出ピットの範囲を一旦掘削し、粘土を貼り付け構築しており、青野遺跡2号住居跡とはカマドの構築方法が異なるとみられる。青野遺跡2号住居跡と同様のカマド構造を持つ類例は、青野遺跡と同一丘陵上に立地する下萩沢遺跡SI63（宮城県教委2009）がある。下萩沢遺跡SI63は小型の住居跡でカマド側壁の左側を段状に掘り込んで白色粘土を貼り付けている。青野遺跡2号住居跡は遺構検出作業の段階で地山を若干掘り込んで確認したため、掘り方部分が段状であるかは確定でき



第9図 2号住居跡における想定されるカマド構築工程



遺跡名	遺構名	カマドの特徴	特記事項	年代
下萩沢遺跡 (栗原市)	SI63	カマド北壁中央。煙道長さ1.2m、燃焼部幅60cm。燃焼部左側壁部分はにぶい黄褐色シルト(炭を含む)による掘り方を持つ。	規模は長軸3.5m、短軸2.9mの小型の住居跡。方向をそろえる建物群と同一の主軸を持つ。	8世紀後半

第10図 カマド燃焼部側壁に堀り方を持つ住居跡

なかつたが、確認状況から段状の掘り方であった可能性も想定される。このことから、下萩沢遺跡SI63、青野遺跡2号住居跡の構築方法は極めて類似すると考えられる。このようなカマド構築方法が宮城県内で確認できるのか、伊治城周辺に限られるのかは、類例の増加をまって構築方法の系譜について検討を行う必要がある。

4. 集落構造と問題点について

防火水槽設置に伴う発掘調査の結果、わずか94m²の調査区から竪穴住居跡が2軒確認された。2軒の竪穴住居跡は同時に存在したかどうかは明確ではないが8世紀末葉から9世紀初頭頃に営まれた可能性が考えられる。青野遺跡では今回発掘調査が初めて実施されたため、周辺の様相は不明であるが、昭和40年代に宅地造成の際、遺物が出土した想定される地点は今回の調査区から東に約70~80mであり、今回調査を行った西側の畠地からは土師器小破片が採集されているほか、木葉痕をもつ土師器甕底部片が採集されたということを地元の方からご教示を得ている。遺物が採集される地点では今後、竪穴住居跡が確認される可能性が考えられ、また、今回の調査成果から竪穴住居跡の分布は比較的密度が高いことも想定される。今後、周辺で発掘調査を実施し、その成果をもとに集落構造を検討していく必要がある。

V. まとめ

青野遺跡の発掘調査により、古代の竪穴住居跡2軒、詳細な時期が不明な溝跡1条を確認することができた。確認された竪穴住居跡のうち1軒（2号住居跡）は残存状況がよく、床面や堆積土などから年代を検討できる資料を得ることができた。出土遺物の検討から8世紀末葉から9世紀初頭頃のものと考えられ、出土した須恵器は伊治城跡出土須恵器と類似すると考えられる。また、カマドの残存状況が良好であったため、この地域におけるカマド構築方法の一端を検討する資料を得ることができた。

また、約94m²という些少な面積の発掘調査であったが、ほぼ同一の方向をもつ竪穴住居跡2軒が確認されており、周辺にはさらに多くの竪穴住居跡が存在すると想定される。青野遺跡における古代の集落構造の解明や出土遺物からみた伊治城跡とのかかわりは今後の課題と考えられる。

引用・参考文献

- 宮城県多賀城跡調査研究所1978『伊治城跡I－昭和52年度発掘調査報告一』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第3冊
- 築館町教育委員会1992『伊治城跡－平成3年度発掘調査報告書一』築館町文化財調査報告書第5集
- 築館町教育委員会1995『伊治城跡－平成6年度発掘調査報告書一』築館町文化財調査報告書第8集
- 古川市教育委員会『名生館官衙遺跡』古川市文化財調査報告書
- 瀬峰町教育委員会2000『桃生田前遺跡 下富前遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第19集
- 佐藤敏幸2007「宮城県北部・沿岸部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』
平成15年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書 研究代表者辻秀人
- 宮城県教育委員会2009『原田遺跡 下萩沢遺跡』宮城県文化財調査報告書第219集

経ヶ崎遺跡

I. 調査に至る経緯

経ヶ崎遺跡は高清水地区に所在する。奥羽山脈から東に伸びる標高約30mの平坦な丘陵上に位置する古代の集落跡である。周辺には西手取遺跡、五輪遺跡、観音沢遺跡、松ノ木沢田遺跡など古代の集落が多数確認されている。経ヶ崎遺跡では平成10年度に町道拡幅に伴う発掘調査、店舗造成に伴う確認調査が行われており、町道拡幅地点では8世紀後半頃の集落が約1.5kmの範囲の中に200m間隔で数軒ずつがまとまって確認されている（高清水町教委2000）。

平成18年10月、小池勇氏より経ヶ崎遺跡において、整地及び擁壁設置計画の協議があった。計画は敷地周囲に擁壁を設置するとともに、標高の高い北側部分を30cm切り土し、整地するもので、北東隅付近では乗り入れのための切り土が行われるものであった。対象地北側では店舗造成の際、確認調査が行われており、遺構は確認されていない。切土が行われる計画なので、事業者、宮城県教育庁



1 : 経ヶ崎遺跡 2 : 大寺遺跡

第11図 経ヶ崎遺跡、大寺遺跡の位置と周辺の遺跡

文化財保護課、栗原市教育委員会で協議を行い、確認調査を行うこととした。

確認調査は平成19年3月22日より開始した。擁壁を設置する部分および整地に際し切り土が行わられる予定地点を中心に重機を用いて表土除去を行い、遺構検出作業を行った。その結果、対象地北西側部分、W拡張区を中心に古代の竪穴住居跡2軒、竪穴住居跡に伴う外周溝の可能性が高い溝跡1条、N区中央付近で縄文時代の落とし穴遺構の可能性が高い土坑1基が確認された。3月22日及び23日に事業者、宮城県教育庁文化財保護課、栗原市教育委員会が現地において保存協議を行い、遺構を確認した西側については擁壁設置区間の一部を計画変更しU字溝を設置すること、対象地全域に盛り土を行い検出した遺構を保存することとなったので、遺構の精査は行わず、検出段階の諸記録を作成した。3月26日に確認調査を終了し、埋め戻し作業を行った。その後の協議においてU字溝設置を取りやめ、ブロック土留めのみの設置となつたことから、7月27日に立会い、遺構面に影響がないことを確認した。

記録は検出した遺構については1/20の平面図を作成するとともに調査区については工事用図面に位置を記録した。写真はデジタルカメラ（800画素）を用いた。その後、遺構、遺物の整理作業を行い、報告書作成を実施した。

II. 基本層序

調査区内の基本層序は以下のとおりである。

I層 にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト。調査区内の表土であり、耕作土である。

II層 黒色（10YR2/1）粘土質シルト。旧表土であり、調査区内では中央から南側斜面に分布する。

III層 明黄褐色（10YR6/6）粘土。東側ではにぶい橙色（5YR6/4）砂質粘土を部分的に確認できる。本調査区内の地山である。

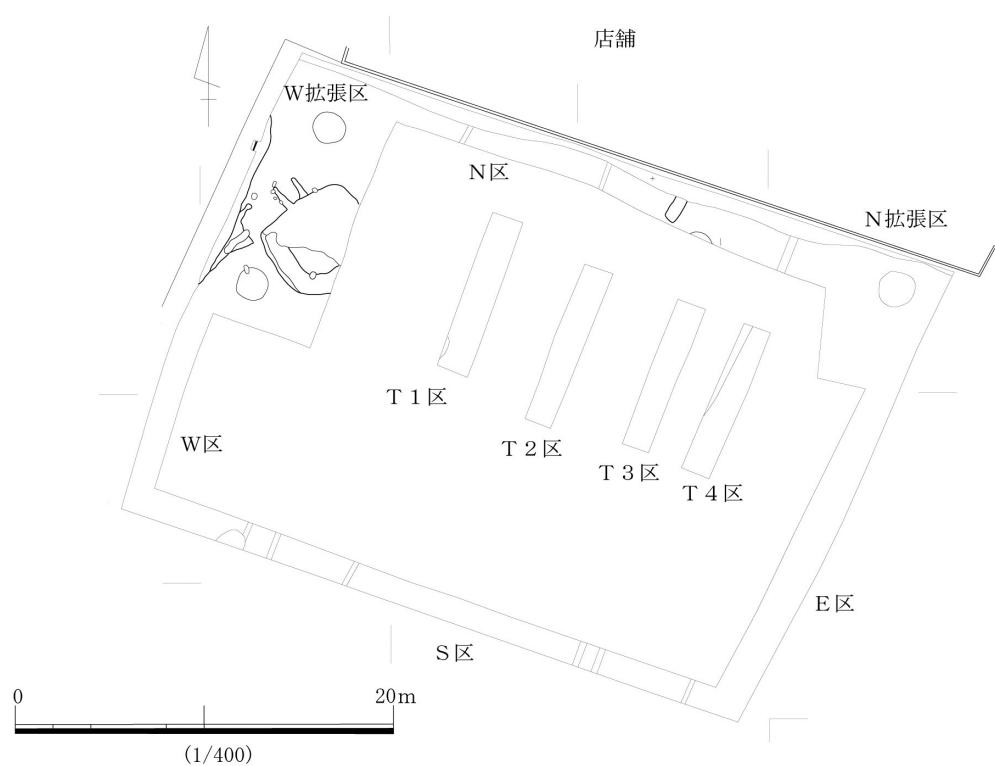
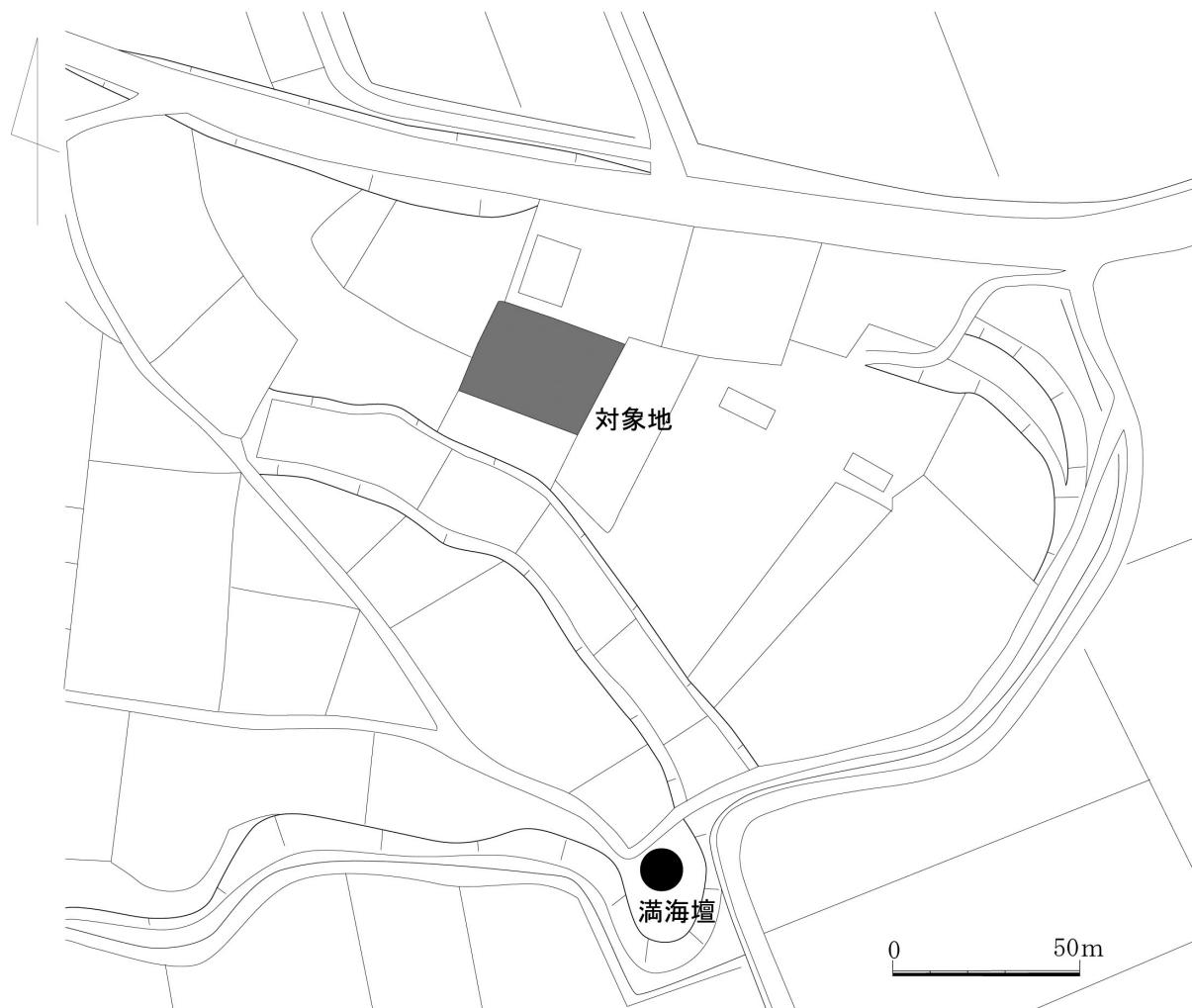
III. 検出された遺構と遺物

1. 竪穴住居跡と出土遺物

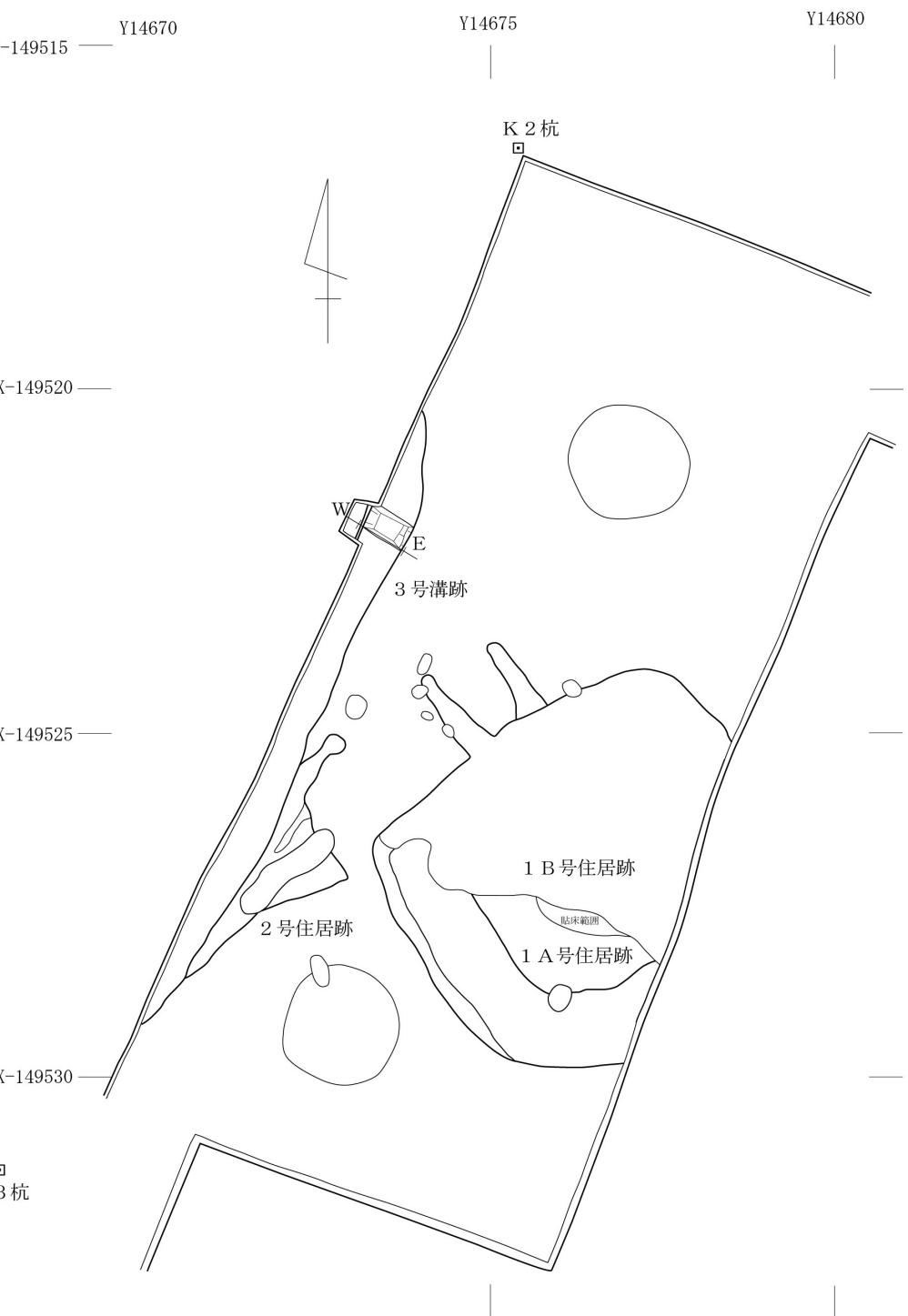
【1号住居跡】

W拡張区、III層で確認された。カマド煙道が2基あること、南側では古い段階（A）の住居掘り方と新しい段階（B）の貼床が確認されたことから1号住居跡はAからBに造り替えられている。

1号住居跡の規模は南北5.56m、東西4.90m以上であり、遺構は調査区外の東側につづく。平面形は隅丸方形である。方位は西辺で計るとN-30°-Wである。北側では黒色土を主体とする堆積土が残存するが、南側では床あるいは掘り方底面である地山が露出する。住居中央では1A号住居跡を埋め戻した地山ブロックを多く含む黒色土により貼床が行われている。カマドは西辺中央にある。煙道の長さは1.34mであり、壁の一部は火をうけ赤変する。カマド周辺の堆積土には焼土、炭化物が



第12図 対象地の位置とトレンチ配置図



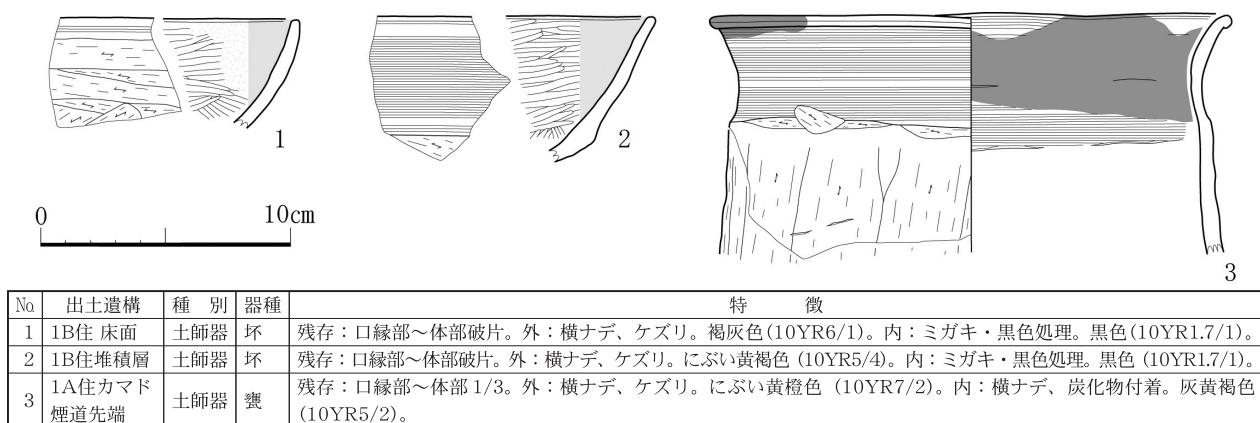
第13図 W拡張区遺構配置図

含まれる。床面が露出した南側で幅0.25mの周溝、長軸0.41m、短軸0.33mの橢円形の主柱穴を1基確認した。また、住居南西側、2号住居跡と重複する溝状の落ち込みは1B号住居跡に伴う外延溝の可能性もある。堆積土は黒色土である。長さは約1.7m、幅約0.4mをはかる。

遺物は住居堆積土、カマド堆積土、南東隅床面より製作にロクロを用いない土師器壊（第14図1、2）、甕の破片が出土している。

1A号住居跡の規模は1B号住居跡と重複しており、精査を行っていないことから詳細は不明である。一部が確認されたのみであるが方形を基調とするとみられる。方位は南辺で計るとN-32°-Wである。掘り方埋土は地山ブロックをまばらに含む黒色土である。カマドは西辺中央にある。煙道の長さは1.19mであり、壁の一部が火をうけ赤変する状況を確認できた。カマド周辺の堆積土には焼土、炭化物が含まれる。

遺物はカマド煙出し先端部分より製作にロクロを用いない土師器甕（第14図3）が出土している。



第14図 1号住居跡出土遺物

【2号住居跡】

W拡張区、III層で確認された。3号溝跡と重複し、これより古い。規模は東西2.8m以上であり、遺構は調査区外の西側につづくが方形を基調とするとみられる。方位は東辺で計るとN-59°-Eである。南側では床面である地山ブロックを多く含む黒色土が露出し、残存状況は悪い。また、北東隅付近では汚れた地山に類似しており、掘り方の可能性もある。カマドは北辺にある。煙道の長さは1.0mあり、壁の一部が火をうけ赤変する。側壁は明確には認識できなかったが、煙道南側で確認された黄褐色粘土が側壁である可能性も考えられる。長さは0.87m残存している。カマド周辺の堆積土には焼土、炭化物が含まれる。

遺物はカマド燃焼部付近の堆積土より土師器破片が出土している。

2. 溝跡と出土遺物

【3号溝跡】

W拡張区、III層で確認された。2号住居跡と重複し、これより新しい。弧を描くように南北にのび、

調査区西側につづく。長さは約9.8mが確認された。幅は0.64m、深さは0.17mである。断面形は台形である。堆積土は2層確認し、いずれも自然堆積である。

遺物は出土していない。

3. 土坑と出土遺物

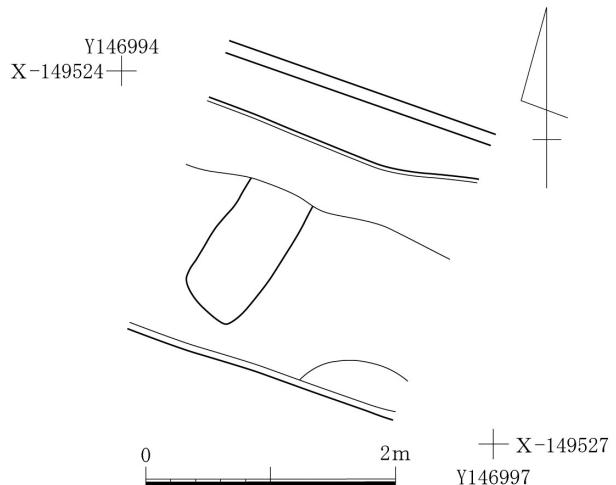
【4号土坑】

N区中央、III層で確認された。北側の一部を擁壁掘り方に壊される。南北1.56m、東西0.77mの隅丸長方形であり、遺構の輪郭ははつきりしない。堆積土は黒色シルトである。

遺物は出土していない。

4. 遺構外出土遺物

表土などから土師器破片、近代以降の磁器が出土している。いずれも小片であり図示できない。



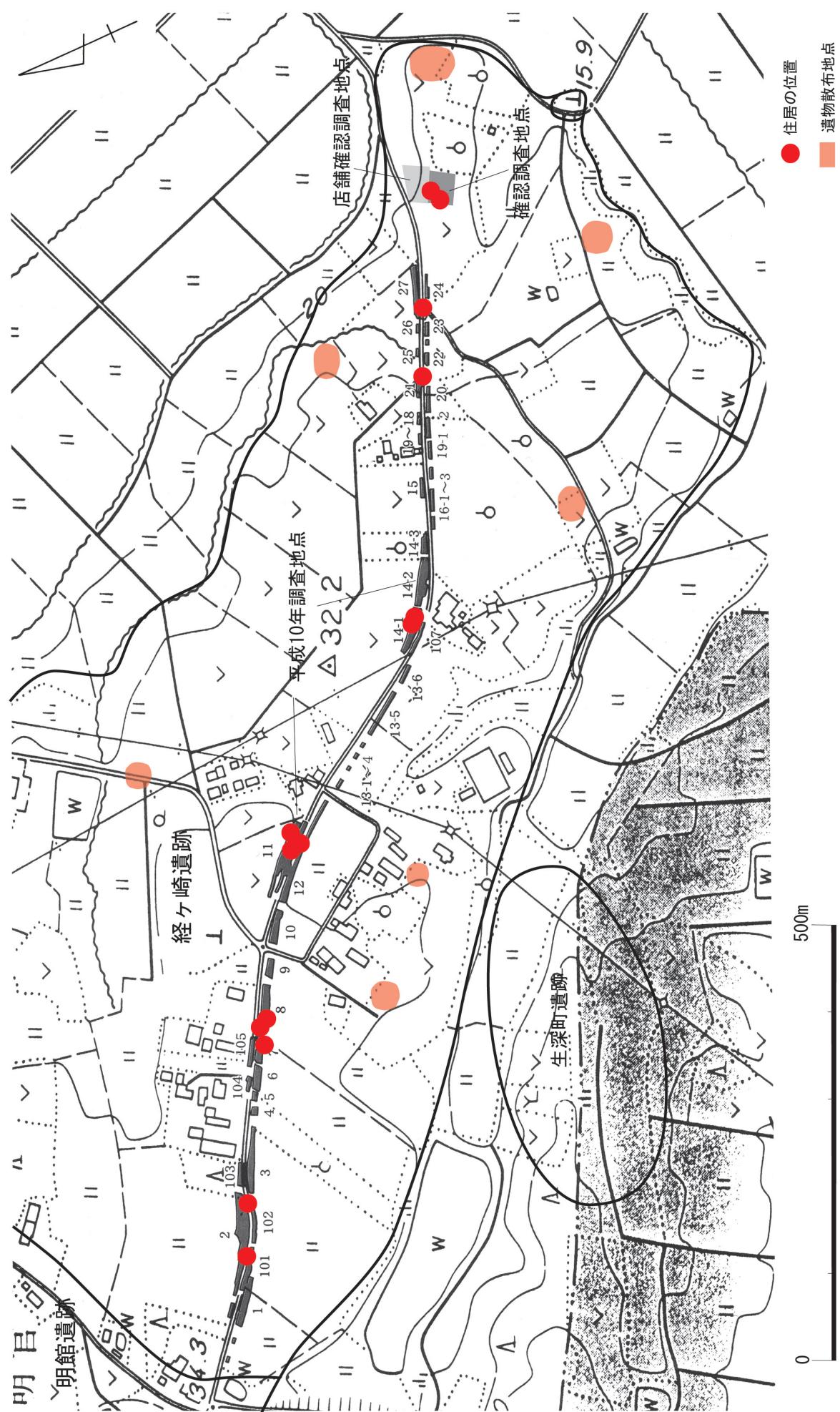
第15図 4号土坑

IV. まとめ

確認調査の結果、W拡張区で竪穴住居跡2軒、溝跡1条、N区中央付近で土坑1基が確認された。これらの遺構はいずれも丘陵頂上付近の平坦面に位置する。遺構の精査を行っていないため、詳細な時期は不明ではあるが、N区で確認した4号土坑は堆積土の状況などから縄文時代の遺構、W拡張区で確認した竪穴住居跡は遺構の形態や出土遺物から古代のものであり、製作にロクロを用いない土師器が出土し、有段の坏があることから平成10年調査で確認されている集落と同時期である8世紀後半頃のものと考えられる。3号溝跡は2号住居跡より新しいものであり、1号住居跡堆積土と類似している。遺構の形態や堆積土の状況、経ヶ崎遺跡では外周溝を伴う竪穴住居跡が確認されていること、調査区内ではほとんど採集できなかった古代の遺物が西に隣接する畠地部分で採集できることから、3号溝跡は西側に位置する可能性が高い竪穴住居跡の外周溝であると推定される。古代の住居跡は1号住居跡がA→Bに拡張されており、2号住居跡→3号溝跡という重複関係をもつ。また、確定的ではないが2号住居跡上面で確認した溝状の落ち込みが1B号住居跡に伴う外延溝であった場合、1B号住居跡は2号住居跡より新しいものとなる。このことから、確認した住居跡は同時に存在していないものがあると想定される。

平成10年度調査では住居跡12軒が長さ約1.5km、幅約15mの調査区内で2~3軒のまとまりがおよそ200m間隔で点在して分布していることが確認されている。今回確認された住居跡は対象地内の北西側に分布している。隣接する畠地部分で古代の遺物が散布していることから、3号溝跡を伴う住居跡はこの畠地内にあると想定される。したがって、この地点の住居跡のまとまりはさらに西側の

第16図 経ヶ崎遺跡住居分布図



畑地までつづくものとみられる。調査区は平成10年調査東側で確認されたSI40住居跡より約150m離れており、さらに調査区より約150m東側、丘陵先端部の畑地においても土師器の散布を確認できるので、平成10年調査区東側において住居跡のまとまりの位置を推定できる資料を得られたことは重要な成果である。

今回の確認調査により経ヶ崎遺跡の遺構分布の特徴がさらに明確になったことから、遺跡内の踏査を継続して行い未調査地点における遺物の散布状況（註1）＝住居跡のまとまりの推定地点を確認することは遺跡の保護を行ううえで今後重要な作業となると考えられる。

註

註1 第16図に示した遺物採集地点のデータは高清水町史編纂委員会による踏査データを参照させていただいた。

引用文献

高清水町教育委員会1998「経ヶ崎遺跡」『経ヶ崎遺跡　観音沢遺跡』高清水町文化財調査報告書第2集

大寺遺跡

I. 調査に至る経緯

大寺遺跡は高清水地区に所在する。奥羽山脈から東に伸びる標高約30mの平坦な丘陵上に位置する縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世の遺跡である。昭和29年の土取りの際、丘陵先端部で興野義一氏により縄文時代早期の土器が多数発見された。「大寺式」と呼ばれているこの土器群が出土した大寺遺跡は宮城県北部における縄文時代早期の標識遺跡として学史上著名な遺跡である（林1963、興野1970）。周辺には佐野遺跡、観音沢遺跡など古墳時代から古代の集落や中近世の城館である高清水城跡が所在する。

平成20年9月、鈴木陸奥夫氏より自宅内の道路を広げるため、法面掘削を行いたいとの協議があった。掘削幅は2mであり、周辺で遺物が採集されることから、事業者、宮城県教育庁文化財保護課、栗原市教育委員会で協議を行い、確認調査を行うこととした。

確認調査は平成20年10月30日に実施した。北側で大型の落ち込み、南側で竪穴住居跡とみられる黒色土の落ち込みが確認され、法面部分では掘り方埋土が確認された。このことから、事業者と計画変更について協議を行ったが、変更が不可能であったことから、南側で確認された竪穴住居跡は平成21年4月に発掘調査を実施すること、北側については11月5日に遺構の掘り下げを行うこととした。調査の結果、北半部分で確認された落ち込みは近世以降の遺物を含む風倒木とみられた。

平成21年4月2日より竪穴住居跡部分の事前調査を行い、竪穴住居跡とみられていた範囲の北半分は近代以降の溝跡であり、竪穴住居跡は約1.5mが残存しているのみであった。また、昨年11月に法面工事をおこなった部分を検討した結果、竪穴住居跡は井戸状の土坑に壊されるが南側に約1.5mのびることが判明した。各種記録を作成し、4月3日に発掘調査を終了した。

記録は検出した遺構については1/20の平面図を作成し、1/100で調査区周辺の地形について平面図を作成した。写真はデジタルカメラ（800画素）を用いた。その後、遺構、遺物の整理作業を行い、報告書作成を実施した。

II. 基本層序

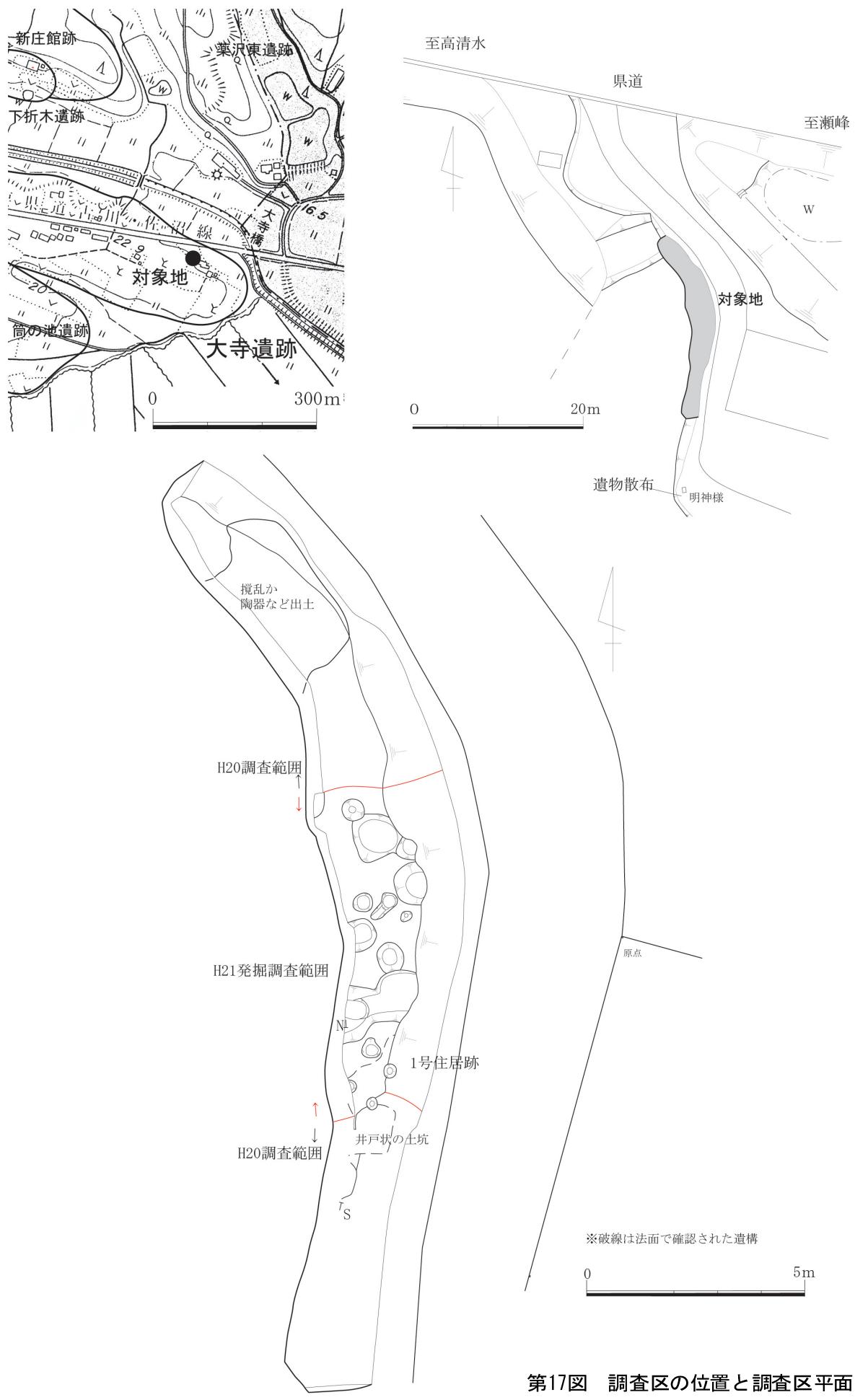
調査区内の基本層序は以下のとおりである。

I層 黒褐色（10YR3/2）シルト。調査区内の表土である。

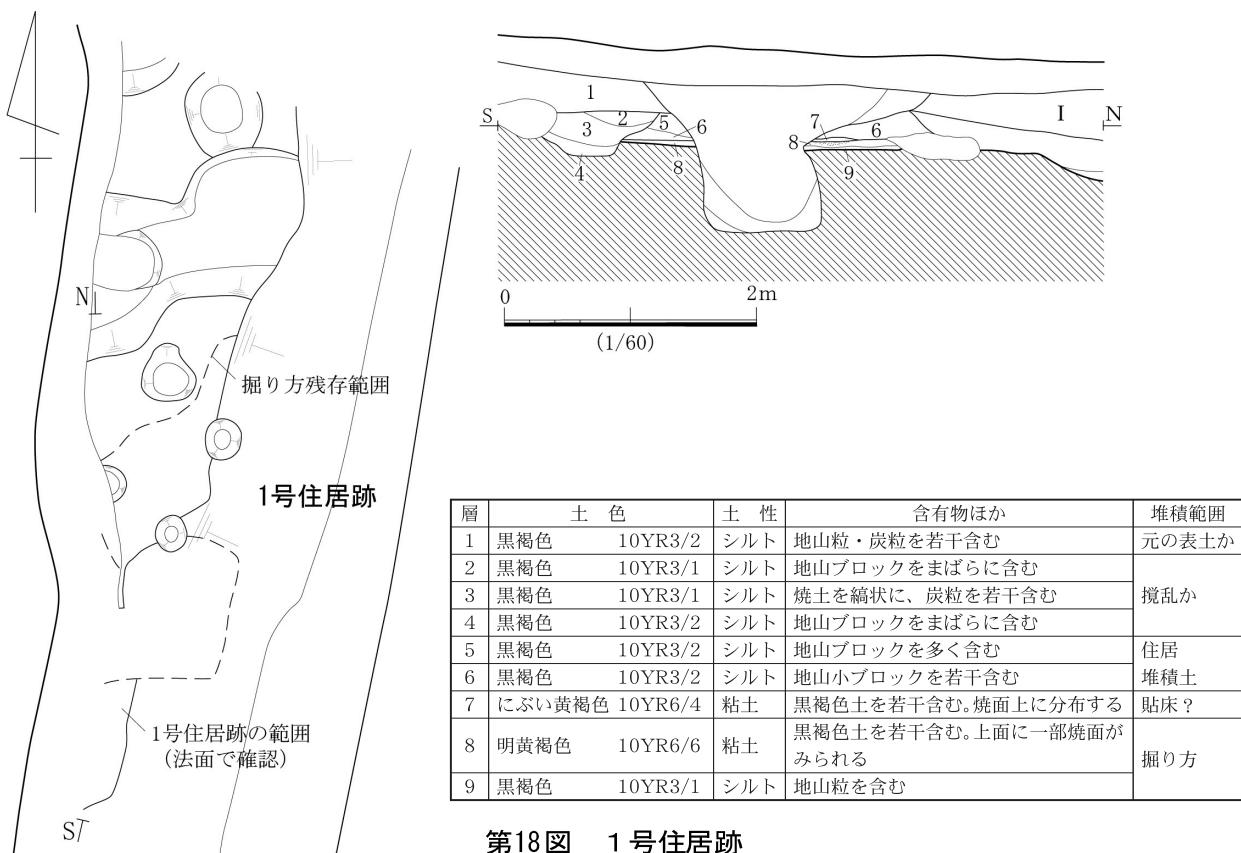
II層 明黄褐色（10YR6/6）粘土。本調査区内の地山である。

III. 検出された遺構と遺物

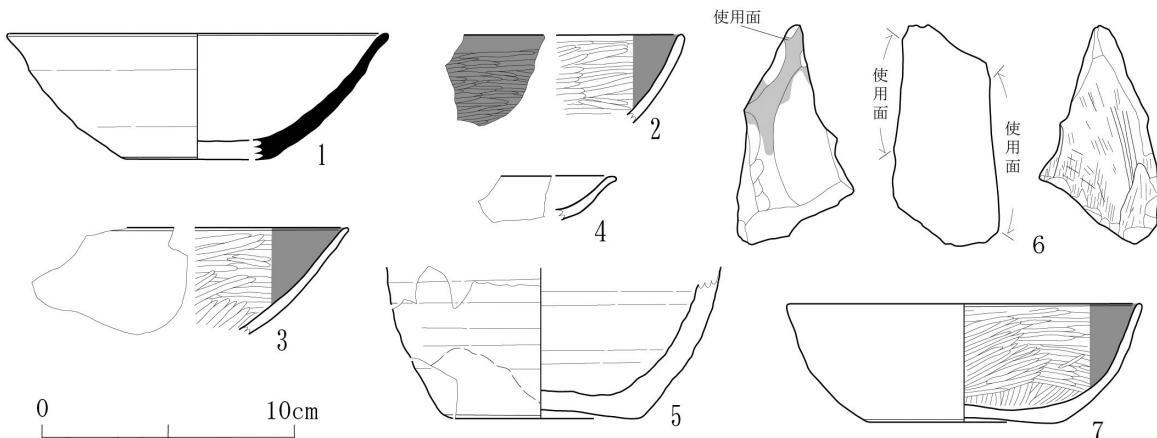
古代の竪穴住居跡1軒、古代より新しい時期の井戸状の土坑が確認され、住居跡や搅乱層から土師



第17図 調査区の位置と調査区平面図



第18図 1号住居跡



番号	出土遺構 層位	種別	器種	特 徴
1	SI 1 床	須恵器	壺	残存: 1/3。口径: 14.8cm。底径: 5.8cm。器高: 5.0cm。外面: ロクロナデ。灰白色 (2.5Y8/1)。底部: 不明。内面: ロクロナデ。灰白色 (2.5Y7/1)。
2	SI 1 堀り方	土師器	壺	残存: 口縁部~体部。外面: ロクロナデ、ヘラミガキ・黒色処理。黒色 (N2/0)。内面: ロクロナデ、ヘラミガキ・黒色処理。黒色 (N2/0)。
3	表採	土師器	壺	残存: 口縁部~体部。外面: ロクロナデ。にぶい黄橙色 (10YR6/4) ~黒色 (10YR2/1)。内面: ヘラミガキ・黒色処理。黒色 (10YR2/1) ~にぶい褐色 (7.5YR5/3)。
4	調査区 北端黒色土	陶器	小皿	残存: 口縁部~体部。外内面: ロクロナデ、施釉。貫入。
5	カクラン	土師器	甕	残存: 底部。底径: 7.4cm。器高: 6.0cm残存。外面: ロクロナデ。火を受けて摩滅。灰褐色 (7.5YR5/2)。底部: 未調整か。内面: ロクロナデ。にぶい黄橙色 (10YR7/3)。
6	カクラン	石製品	砥石	長さ: 8.7cm。幅4.6cm。厚さ4.1cm。2面使用。
7	明神様 表採	土師器	壺	残存: 3/5。口径: 13.8cm。底径: 7.4cm。器高: 4.7cm。外面: ロクロナデ。にぶい黄橙色 (10YR7/3) ~黒褐色 (10YR3/2)。底部: 回転糸切り。内面: ヘラミガキ・黒色処理。黒色 (10YR2/1)。

第19図 出土遺物

器、須恵器、陶器などが出土した。

1. 壱穴住居跡と出土遺物

【1号住居跡】

調査区南側に位置する。井戸状の土坑、近代以降の搅乱などにより壊されており、残存状況は悪い。このことや調査区の関係から平面形は不明である。確認された規模は長軸3.1m、短軸1.3mである。堆積土は黒褐色シルトであり、下層は自然堆積とみられる。壁を確認することができなかつたが、堆積土は厚さ0.20m確認された。床は黒色土粒を含む明黄褐色粘土を床面としており、極めて硬い。調査区壁際の断面観察により床上面において焼面が確認された。焼面の規模は長さ0.28m、厚さ4cmである。この焼け面は厚さ3cmのにぶい黄橙色粘土により覆われている。主柱穴、周溝などの床面施設は確認されなかつた。

遺物は堆積土より製作にロクロを用いる土師器坏、製作にロクロを用いない土師器甕、床面より須恵器坏、掘り方より製作にロクロを用いる土師器坏や甕が出土している。

2. 搅乱、遺構外出土遺物

表土や搅乱などから土師器、須恵器、近代以降の磁器が出土している。土師器では製作にロクロを用いた坏、甕、製作にロクロを用いない甕、須恵器甕、砥石、鉄滓がある。ここでは調査区周辺の遺跡の様相を考えるうえで参考となる遺物を図示する。

3. 稲荷様の祠付近から出土した土師器坏について

調査期間中、地権者である鈴木陸奥夫氏より稻荷様の祠付近から出土したという土師器坏1点を寄贈していただいた。製作にロクロを用いる土師器坏で、底部切り離しは回転糸切りによるものである。内面のヘラミガキは井桁状に施される。

IV. まとめ

事前調査の結果、古代の壹穴住居跡1軒を確認することができた。残存状況が悪く構造や年代について詳細な検討はできないが、製作にロクロを用いた土師器が出土していることから平安時代のものと考えられる。床面上で焼け面が確認されたことから、火を用いた何らかの作業が行われ、その後焼け面上に貼床されたと想定される。また、1号住居跡が確認された地点の南10m付近にある稻荷様の祠付近からも製作にロクロを用いた土師器坏が採集されており、調査区表土にも製作にロクロを用いる土師器が多く含まれているので、平安時代の集落が調査区周辺に分布しているものと考えられる。

引用文献

林謙作1963「東北地方早期縄文文化の展望」『考古学研究』第9巻第2号 考古学研究会 20-31頁

興野義一1970「宮城県大寺遺跡出土の早期縄文土器」『古代文化』第22巻第11号 (財) 古代学協会 239-242頁

写 真 図 版



調査区全景（南東から）



調査区全景（北から）



1号住居跡（南から）



1号住居跡カマド（南西から）



2号住居跡（南から）



2号住居跡堆積土中遺物出土状況（南東から）



2号住居跡カマド（南東から）



2号住居跡堆積状況（西から）

写真図版1 青野遺跡



2号住居跡カマド右脇遺物出土状況（南から）



2号住居跡K1 遺物出土状況（北から）



2号住居跡カマド側壁断ち割り状況（南から）



2号住居跡カマド側壁断ち割り状況（北から）



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14

2号住居跡出土遺物

写真図版2 青野遺跡



1号住居跡出土遺物

写真図版3 経ヶ崎遺跡



調査区（北から）



1号住居跡（北から）



1号住居跡断面（東から）



1号住居跡断面細部（東から）



第19図5



第19図6



第19図7

出土遺物

写真図版4 大寺遺跡

報 告 書 抄 錄

栗原市文化財調査報告書第14集

青野遺跡ほか

平成23年3月28日 印刷
平成23年3月30日 発行

発行 宮城県栗原市教育委員会
〒989-5171
宮城県栗原市金成沢辺町沖200番地
TEL:0228-42-3515 FAX:0228-42-3518

発行 南部屋印刷株式会社
〒987-2215
宮城県栗原市築館高田一丁目7番36号
TEL:0228-22-2131 FAX:0228-22-2175
